

京都府埋蔵文化財情報

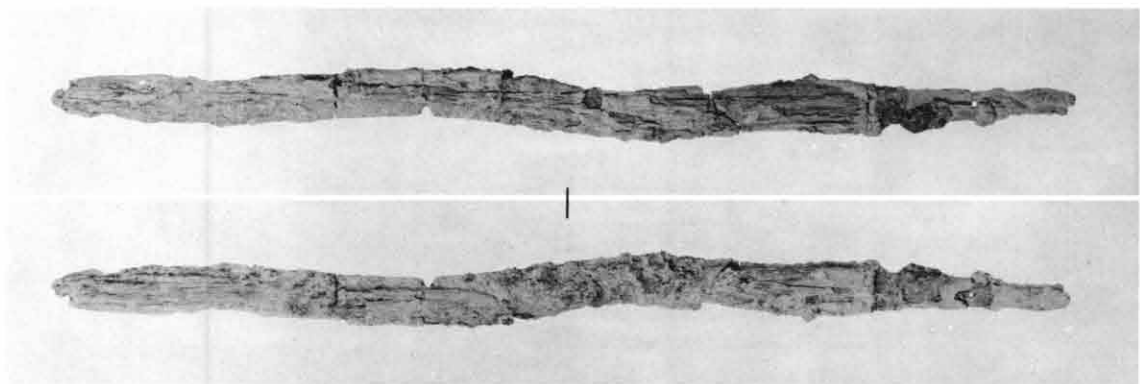
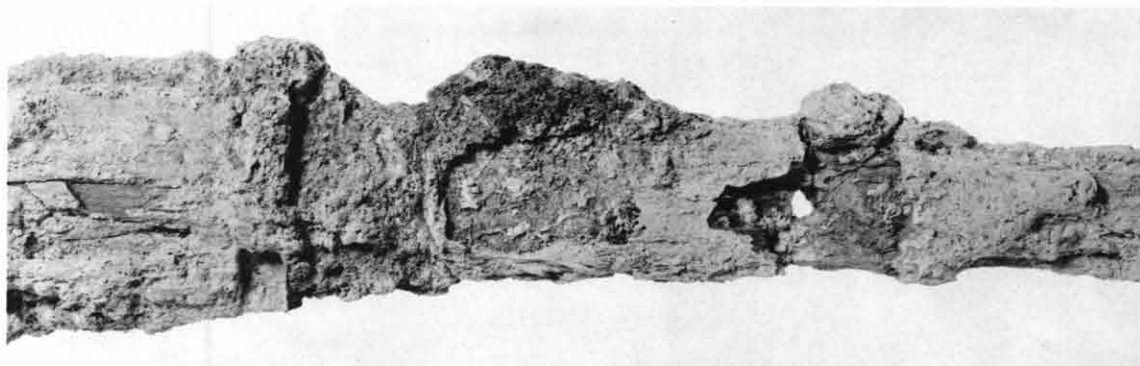
第 34 号

陝西省における秦漢考古学の現状	黄 曉芬	1
綾部市・八田川上流域における古墳の変遷	小池 寛	14
—綾部市・奥大石古墳群を中心にして—		
長沙銅官窯模倣須恵器について	伊野 近富	24
—平成元年度発掘調査略報—		33
3. 日光寺遺跡第2次	8. 興 遺 跡	
4. 上 野 遺 跡	9. 千代川遺跡第15次	
5. 温江遺跡第2次	10. 長岡宮跡第228次 (7AN17C地区)	
6. 土師南遺跡第4次	11. 長岡京跡左京第222次 (7ANDKD-3地区)	
7. 観音寺遺跡		
府下遺跡紹介 45. 大鳳寺跡		50
長岡京跡調査だより		53
センターの動向		56
府下報告書等刊行状況一覧		58
受贈図書一覧		63

1989年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

綾部市・八田川上流域における古墳の変遷



(2) 蛇行剣および関部分細部



(1) 奥大石2号墳 S X 204完掘状況 (北から)

陝西省における秦漢考古学の現状

黄 曉 芬

黄河中流の関中平野に位置する陝西省は、中国古代文明の発祥地の一つである。長安は、千年以上の帝都として周・秦・漢・唐など11王朝の都城であった関係から、各王朝の遺跡と遺物は非常に豊富である。本稿では、陝西省で出土した秦漢考古の新資料を中心として、秦漢文化について述べてみたい。

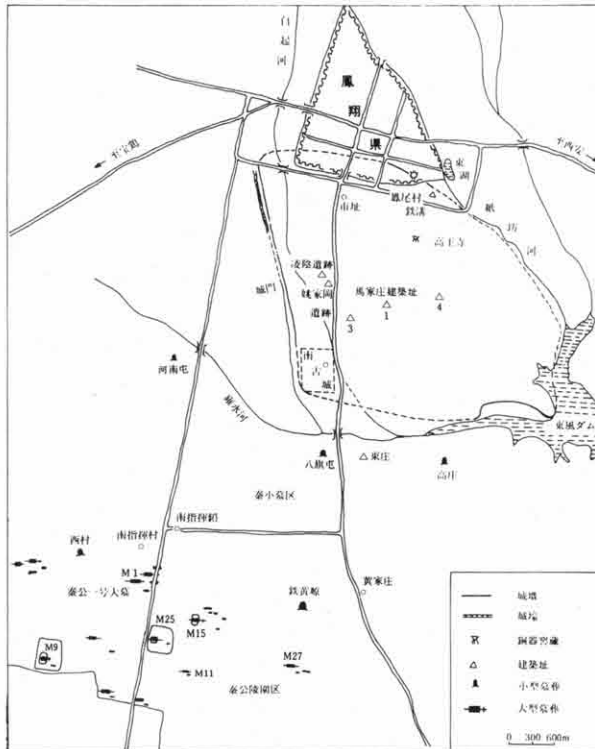
1. 秦と秦代文明

秦王朝は中国で最初の統一国家であり、中国古代史でも重要な変革の時代と認められている。しかし、秦帝国は最も短命の王朝であるため、従来、文献と考古資料に乏しく、秦文化には不明な部分が多い。

したがって、その全体像の把握は非常に困難と考えられていた。

ところが、最近の15年間、秦文化の考古資料の精粹とも言える秦雍城遺跡・秦公陵园・秦咸陽宮・秦始皇帝兵馬俑及び春秋戦国期(B. C. 771年～B. C. 221年)の400基以上の秦人墓など、発掘による遺跡・遺物の大量発見が相次ぎ、秦文化の様相も徐々に明らかになってきている。

秦史は秦始皇帝の統一を境として、春秋戦国期の秦と統一後の秦帝国に分けられるので、この二時期について述べ

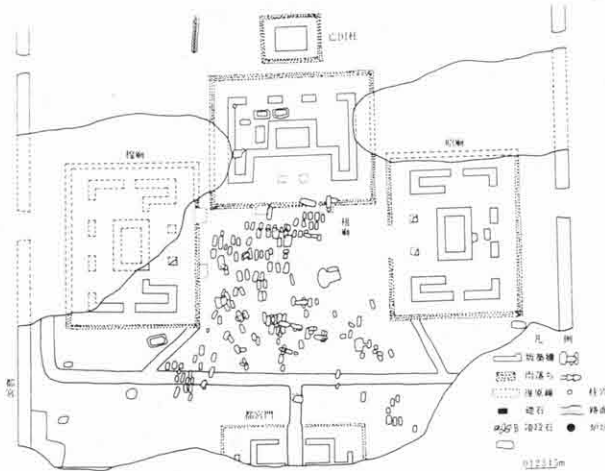


第1図 秦雍城遺跡図(『東アジア文明の源流—中国陝西省出土文物展覧(1989)』より転載)

てみよう。

①秦雍城遺跡

『史記・秦本紀』によると、春秋時代初期に秦の徳公は、元(B.C.677)年に都を雍(陝西省の鳳翔県所在)に遷し、その後、秦公二十世代の都にすること、300年間に及んだ。1962年の試掘調査によると、雍城遺跡には、東西の長さ4.5km・南北の幅約2kmにわたり、版築の城壁も残っていることがわかった。^(注1)1976年以降、秦雍城の発掘調査が続けられ、宮殿建築、祭祀遺跡のほか、意外な発見として大規模な王公陵園及び春秋期の最大の王墓である秦公一号大墓などがある(第1図)。さらに、一般貴族の中・小型墓も多数発見され、こ

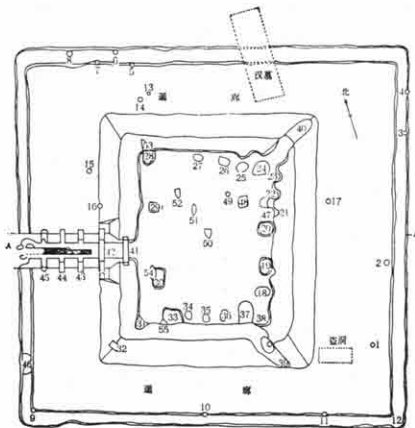


第2図 馬家庄1号建築址(宗廟)、『東アジア文明の源流・中国陝西省出土文物展覧(1989)』より転載

れにより、春秋時代の秦が先進的な文化をもっていたことが次第に明らかとなってきた。

②宗廟建築遺跡

陝西省鳳翔県馬家庄の北部台地には、秦の宮殿建築群が配置されている。1981~1984年に発掘調査された1号宮殿(宗廟)遺跡は、朝寝・亭台・中庭・門塾・東西廂に分けて建てられていた^(注2)(第2図)。



第3図 春秋秦国陵陰遺跡平面図
1~38:柱洞, 39~40:冲刷溝,
47~55:片石
『陝西考古重大発見(陝西人民出版社1986)』より転載

宗廟建築は、真ん中が四阿式の南向き大型建築で、平面は「凹形」を呈し、正面幅20.8m・奥行き13.9mである。凹形部分は前朝(朝堂)で、その後の長方形の建物は後寝であり、朝堂前の中央部は、版築台が二つあり、双楹柱の基台(幡などの掲揚台)と考えられている。朝寝の両側には東西挟室があり、北の方は門が三つあり、北に三室があったと考えられている。その北方に亭台が配置され、正面幅は5.4m・奥行き3.8mである。屋根の下は散水(雨落ち溝)があり、降雨に対する水はけが工夫されている。

その南側では左右両方に同形態の宗廟建築が

一座ずつある。向かって北側の正面中央が祖廟で、左側が昭廟、右側が穆廟と考えられる。その中庭で祭祀坑がたくさん発見され、殉死させられた人骨や動物遺骸のほか、祭祀用の陶器(鼎・豆・壺)・玉器(璜・璧・圭など)が出土した。そのうち、祭祀坑は、牛の坑が86基、羊犬の坑が55基、人間の坑が8基、車坑2基あり、また、骨の出土がみられない5つの坑は、肉の祭祀坑の可能性が考えられている。その他、大量の軒丸瓦・軒平瓦や銅釘、鉄錫も出土した。遺跡の規模と遺物を検討した結果、春秋後期秦国の宗廟祭祀建築と認められた。その建築形式は殷周時代「前朝後寝」の伝統をひき、秦漢時代になって、前堂に双楹柱を建てる新構造を開発しており、中国古代建築史上の重要な資料となっている。

③凌陰遺跡

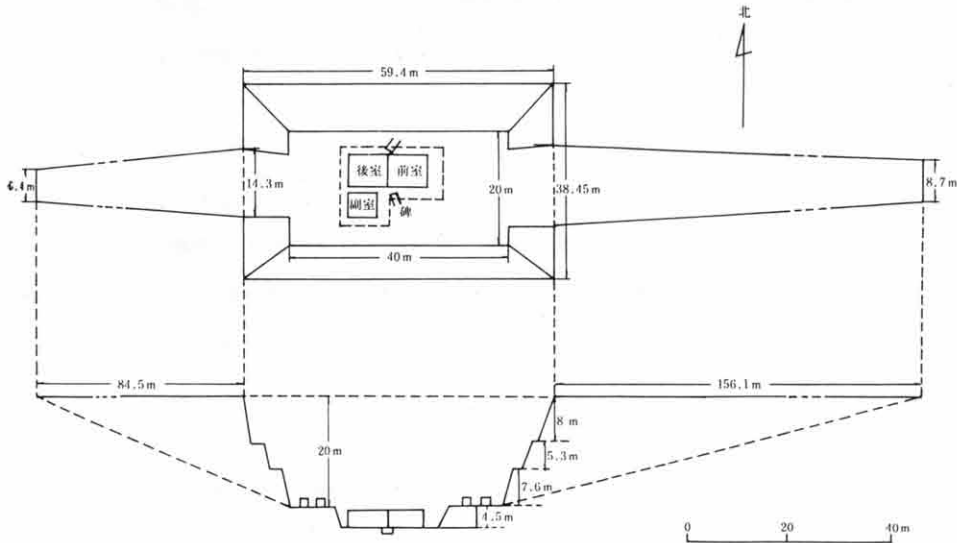
凌陰遺跡といえば、氷を貯蔵したところで、古代宮殿の冷蔵庫である。日本の奈良時代にも同じ施設があり、氷室といわれていた。『詩経』と『周禮』の記載によると、周代(B. C. 1100年～B. C. 770年)にすでに設置されていた。毎年冬の間自然の氷を凌陰に入れ、自然に溶けることを考慮して、使用料の三倍ぐらいを貯蔵し、夏から冬にかけて使ったことが知られる。

鳳翔県姚家崗の秦国凌陰遺跡は、平面が方形に近く(第3図)^(注3)、四辺が版築の垣で、その真ん中に東西10m・南北11.4m・深さ約1.8mの長方形の穴があり、底部には砂質片岩が敷かれていた。氷が193m³ほど貯蔵できる。穴の四周には廻廊がめぐり、西側廻廊の中央部に排水道が横切る。この排水道5か所に排水槽門があり、東端は中央の穴につながっている。西は水道で西南の白起河と結び、溶けた氷水の排水溝となっていた。西側廻廊の南部に通道が一本あり、凌陰への唯一の出入口となっている。遺物は、建築材料の軒丸瓦、軒平瓦、陶製水道管、銅建築部品、及び玉器の璧・圭・玦などがある。凌陰遺跡は、中国先秦時代の宮廷生活史の重要資料である。

④秦の王公陵園

1976年以来、雍城考古隊は鳳翔県南指揮郷で分布調査と発掘調査を実施した。東西7km・南北3kmの広い範囲に、幅2～7m・深さ2～6mの環状溝がめぐらされ、その中から32の大墓、32の車馬坑、中・小型墓なども発見され、全体として13の陵園を構成するようである。殷周時代の「墓而不墳」制度と同じで、封土がなく、墓上には柱穴、排水道管、軒平瓦などの建築遺構と遺物が発見され、春秋時代の秦公陵園には墓上建築を建てたことが明らかになった。^(注4)

1976年から1986年にかけて発掘調査した秦公一号墓は、代表的な秦公大墓である。平面の形状は「中字型」で、全長は300m、東の墓道が長さ156.1m・幅8.7～19.7m、西の墓道が長さ84.5m・幅6.4～14.3mある(第4図)。墓室は東西59.4m・南北38.45m・深さ24



第4図 秦公1号大墓図(『東アジア文明の源流—中国陝西省出土文物展覧(1989)』より転載)

m, 墓室周囲は木炭と青膏泥を埋め込み、意識的に湿気を避けるようにしたものである。槨室は、宮殿の「前朝後寝」制をまねて配置され、主室は14.4m×5.6m×5.6mで、副室は6.8m×4.9m×2.9mを測る。大型の松柏の角材を積み重ねて造られていた。一本の角材は、0.21m×0.21m×6mもある。表面に彩色の漆を塗り、さらに、走っている鹿や鹿を追っている豹などの漆絵を描いている。しかし、過去何度も盗掘され、木棺も腐敗したため、副葬品はほとんど残らず、わずかに木棺の残片や一部の人骨及び絹・麻の衣装破片などがみられるにすぎない。

秦公一号墓の殉死者は182人もあり、すべて木棺に納められ、それぞれ大墓の墓室・棺槨の周囲を埋めた。殉死者の多数が金銀の装身具を身につけており、身分が高いことを表している。このほか、鉄鏟・鉄錫などが十余点あり、春秋時代の秦国においては精良な鉄製工具が使用されていたことが明らかになった。^(注5)

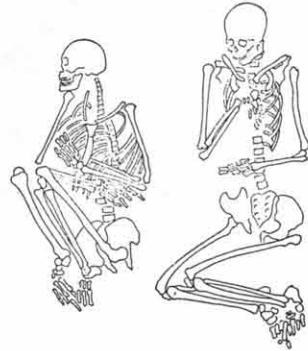
漢・魏晉時代から、この大墓は幾度も盗掘され、280ほどもある盗掘穴は墓室のあたりに蜂の巣状に分布し、直接に槨室に達した盗掘穴は11か所ある。盗掘者が落として散乱したのもあり、金・銅・玉・石・陶・漆・木器など多様である。埋葬当時、豊富な副葬品を伴っていたことが想像できる。埋土層から銘文と文様が付いている儀礼楽器一石磬も出土した。小篆風の文字で「天子匿喜，龔起是嗣，高陽有靈，四方以鼎」と読み、被葬者(墓主)の身分を窺う手がかりになる。「龔」と「起」は「共」と「桓」に当たる。墓主は、秦共公・秦桓公を継いだ秦景公(B. C. 577年～537年)と考えられる。

秦公大墓の規模の大きさと出土した儀礼楽器・鉄工具・金・銅・玉石・陶・漆・木器な

ど、多種類の副葬品から、春秋時代の秦国の社会生産力の強さを示唆している。改めて、秦国が始皇帝の時代に天下統一を果たした原動力になっていたことを知ることができる。

⑤秦文化の編年について

雍城を中心として、関中地区で発見された春秋戦国時期の中・小型墓は400基余りに達する。そこから出土した遺物は、青銅礼器や日常用陶器など、非常に豊富である。屈葬は、個性的な葬法が注目されている(第5図)。屈葬者の身分は、^(注6) 奴隷と言われているが、しかし、陝西地区にある春秋戦国の秦墓資料のうち、屈葬は70%を占め、特に葬具を持ち、副葬品が豊富である。秦文化の起源に関係深いと思われる。洞室墓は、伝統風格を持つ堅穴墓にかわって、次第に中・小型墓の主流を占めるようになる。それらの豊富な墓葬資料から秦文化の編年が可能となる。^(注7) 春秋戦国秦墓を検討すれば、青銅礼器と副葬陶器とも時代の変遷に伴って、小型化され、粗製となり、やがて明器に転換することがわかった。特に、日常陶器の割合が著しく高くなり(第6図)、その背後にある大きな社会の動きを理解することができる。それは、春秋時代の「禮崩楽壞」を示唆している。



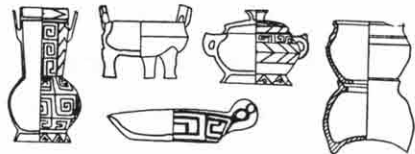
第5図 半坡遺跡・屈葬
(注7論文より転載)

喪葬制度は、民族意識と風俗の印である。秦人墓葬の葬具、埋葬形式、副葬品の組み合わせなどを総合的に検討すれば、秦文化の謎は次第に明らかになると思う。

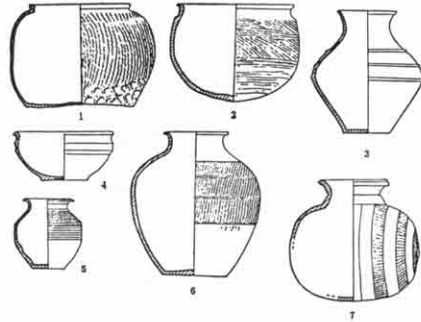
⑥咸陽秦代都城

B. C. 350年、秦国は都を咸陽に移した。咸陽は、その後、秦帝国が滅亡する(B. C. 206年)まで秦王朝の都城であった。特に、秦始皇帝の時代は立派な宮殿建築群が建てられ、秦始皇帝及び高官たちはそこに律令制度を確立し、中国史上の最初の封建帝国が成立した。

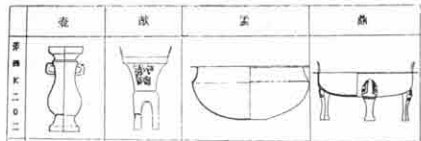
1959～1963年に試掘調査を行った咸陽宮遺跡の広さは殷墟の面積に相当する。長さ約6km・幅約4kmあることがわかった。1974～1975年咸陽宮1号宮殿遺跡が^(注8) 発掘調査された。東西60m



鳳翔八旗屯BM11出土陶器

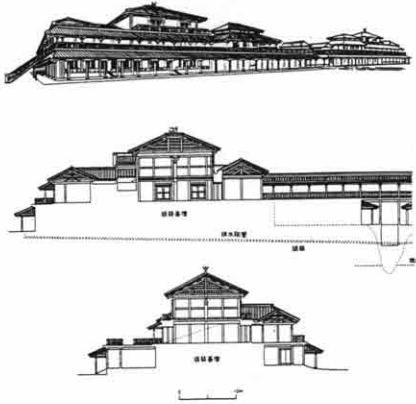


春秋戦国秦漢墓出土陶器



春秋秦墓の青銅器

第6図 春秋戦国秦漢墓出土遺物



第7図 咸陽宮1号宮殿推定復原図(『建築考古学論文集(文物出版社1987.4)』楊弘助論文より転載)

・南北45mの版築台は、地面以上6m、地面以下5mあり、高台式の雄大な宮殿である(第7図)。調査資料によると、正殿を主として、廻廊、寝室、風呂場などが配置されていたことがわかる。殿堂内の床には方磚を敷き、廊下には石で雨落ち溝を作り、階段には素面空心磚を使用し、宮殿には排水溝、陶水道管を合理的に配置し、室内暖炉も設備されていたことがわかった。秦代宮殿の規模の大きさと壮麗さをうかがうことができる。

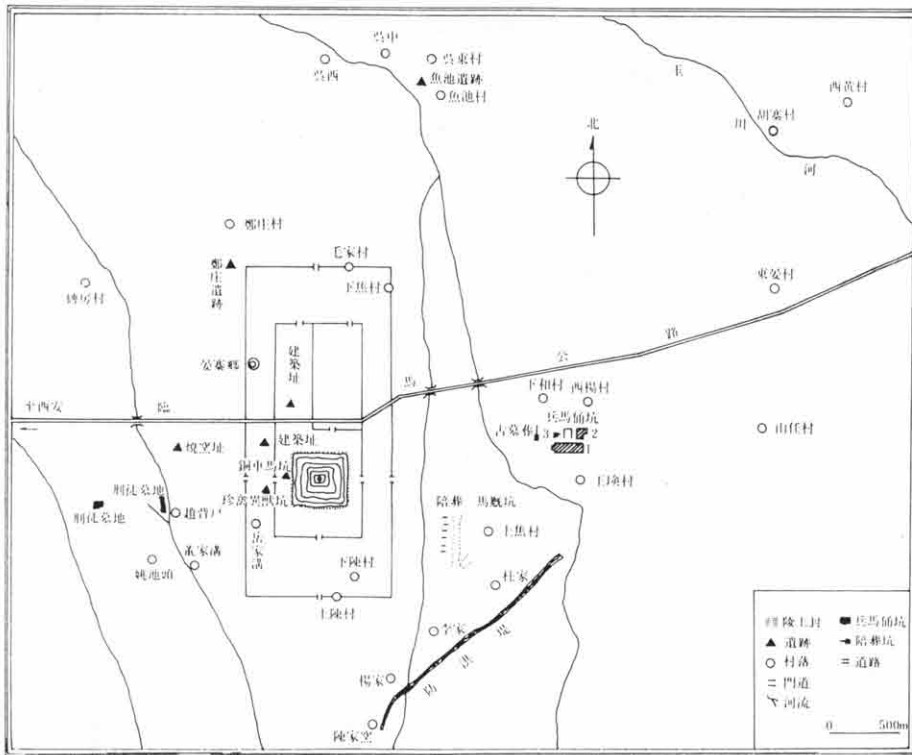
1979年発掘調査された咸陽宮3号遺跡は、東西117m・南北約60mを測る。これも版築の高台建築であるが、自然破壊などにより、廻廊、門道、殿堂の一部のみが残存している^(注9)。

遺物は、銅、瓦、木、石などの建築材料が大量に出土したうえ、秦代宮殿建築の床面には朱紅が塗られていたことも判明した。特に、宮殿、廻廊の残垣部に残った壁画は、中国最古の宮廷壁画として非常に貴重な資料である。その題材は禮儀出行を中心とする人物・車馬・楼閣・狩猟・鳥獸及び植物などで、当時の王朝貴族生活のようすが描かれている。特に3号宮殿壁画の人物絵は座ったり、踊ったり、弓を引いたりする姿がいきいきと表現されている。

⑦始皇帝陵

秦始皇帝陵は、秦嶺山脈の支脈である驪山北麓の台地上に位置している。秦始皇帝は即位から39年間にわたって、数十万の人力を使って地下宮殿を造営した。陵園範囲は7.5km²あり、いろいろの施設が宮城のように配置されていた^(注10)。南部の封土区と北部の宮殿建築区は二重城壁で分けられ、封土の南に皇帝の狩場として珍禽異獸坑が作られているほか、駿馬を飼う厩苑や皇帝外出の銅車馬など、皇帝陵を鎮守する軍隊として大型兵馬俑群も配置している(第8図)。

陵墓封土は方錐型で、底部南北355m・東西350m・残高46mであるが、司馬遷の『史記・秦始皇本紀』によると、その三倍以上の高さがあったという。地下宮殿としての墓室も天井には日月星辰を表し、床には大地を表現し、水銀で川と海の象徴としていた。さらに、人形を動かし、盗掘防止を工夫した機械も備え、人間世界の珍奇異宝を大量に埋めたと記載されている。地下宮殿は未発掘であり、その実態は未知であるが、1981年ボーリング調査が実施された結果、墓室は460m×400mであり、封土底部の面積以上に広く、その中心部では高濃度の水銀が検出されており、『史記・秦始皇本紀』の記載と一致する。



第8図 秦始皇陵園位置図(『東アジア文明の源流—中国陝西省出土文物展覧(1989)』より転載)

封土西側から20mの地点で発見された二組の銅車馬は、縮尺1/2で非常に写實的に作られ、馬具や装飾品など金銀で象嵌し、秦代の金属工芸技術の高水準を代表するものとして、世界中に注目された。同時に、銅車馬の形態と装飾を検討すると、車馬制度から秦代社会の官僚等級制度も反映していると思われる。

封土東側から1.5kmのところ発見された1・2・3号兵馬俑坑は、地下廻廊式の木造建築で、床面はすべて磚が敷かれている。1号兵馬俑坑は、230m×62m×4.5~6.5mで、人間と等身大の6,000体の兵馬俑はみな彩色され、將軍・武官・御者・武士など古代軍陣配列により並べており、豊かで、多様な人間の性格を巧妙に表現している。

秦兵俑が身に付けた青銅武器、刀、劍、戈、矛、弓、弩など質量ともに圧倒的である。特に、秦劍は92cmの長さには達している。広く薄く、長く鋭いといえる特徴である。新製品同様の錆もみられないことから、合金技術の水準の高さがわかる。その他、陵園遺跡から出土した役人俑や「楽府」の銘文を持つ金銀象嵌の編鐘、兩詔銅権、雁足の銅燈など、地下宮殿の散失品と考えられるものもある。また、陶器に多数の陶文字が見られ、秦代手工業の生産管理の貴重な資料となっている。

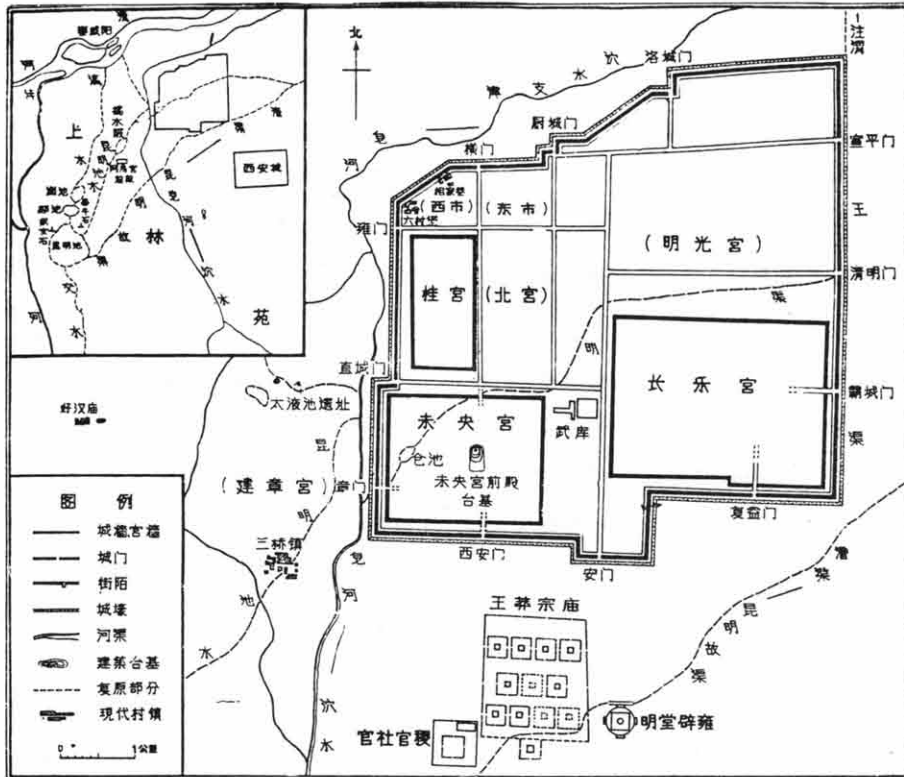
考古学調査の進展に伴って、秦文化の謎は明らかとなりつつあり、秦帝国の雄大さも判明しつつある。しかし、秦文化の起源、秦帝国の形成過程など、いろいろと疑問も残されており、秦史復原の重要な課題となっている。

2. 漢代文明について

陝西省の西安市は、前漢の200年間、漢代封建帝国の政治、経済、文化の中心地である。考古学調査は、宮城・城跡・帝王陵墓を中心に行われ、漢文化が華麗で典型的な封建王朝文化であったことが解明されてきている。

①前漢長安城

漢の高祖劉邦(B.C. 202年～B.C. 195年)が漢王朝を創建した後、渭水の南岸、西安市の西北に新しい都を造営し始めて「長安城」と名付けた。新の王莽の末年(A.D. 8年～A.D. 24年)、漢代長安城は戦火で壊され、廃墟となったが、今でも残存する城壁のつながりがよく見える。未央宮など大型の版築高台や、建築材料の瓦・磚・銅鉄製品・陶器類なども畑の中によく残っている。当時の雄大な規模と都市としての繁栄のようすが偲ばれる。



第9図 漢長安城平面略図(『秦漢考古』北京大学より転載)

発掘調査の資料によると、漢代の長安城の面積は36km²、人口は30万人以上であった。城壁は版築で作られ、底幅16m、高さ12mあまりで、堀は幅が約8m、深さ約3mである。城門が12か所あり、城壁の一辺ごとに三つで、各門は門道が三つ、一門道の幅は6mである(第9図)。

城内には主な道路が八つあり、それぞれの幅も45mぐらいある。一本の道は三つに分けられ、真ん中は幅20mで、両側に幅90cm・深さ45cmの排水溝が作られた。左右の道は12mずつ、それぞれ三つの門道に通じている。その中道は「馳道」と言われ、皇帝の通る道で、両側は一般吏民の通る道であった。

漢代の長安城は、中央・南部はほとんど宮殿区で、西北部に商業市場があり、東市は三つ、西市は六つあった。東西市の周辺は官営の手工業区で、五銖銭の鑄造場や陶器、陶俑の工房などが連なっていた。

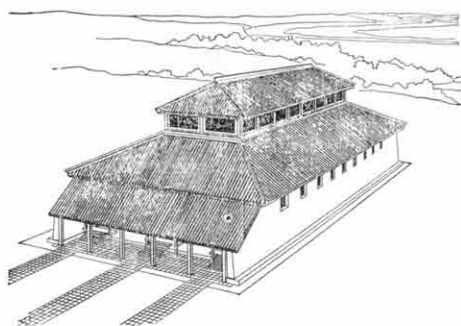
未央宮は、前漢帝王の朝廷政治・行事の中心宮殿区であり、漢長安城の総面積の1/7を占める。宮城の城壁は東西2,150m・南北2,250mで、平面が長方形を呈する。その西側牆壁の残存した高さは11mほどになる。^(注11)

未央宮の前殿は、未央宮宮殿区の正殿であり、いまでも350m×200m×15mの立派な版築基台が残っている。その周辺の畑には瓦や中空レンガ、磚などたくさん残っており、西側の建築遺跡から出土した漢簡・骨籤などは貴重な文字資料として注目されている。特に1986年春から1987年春にかけての発掘調査で三万余枚の骨籤が発見された。すべて牛の骨で製作され、長さ5.8~7.2cm・幅2.1~3.2cm・厚さ0.5cmあり、裏面は平らで、表面にはふくらみを持っている。前漢時代の文字が合計数十万字も刻まれている。記載年代は前漢王朝全体に及んでいる。その内容は当時の中央官府の文書である。例えば、前漢時代の地方職人や官吏が貢いだ手工業製品や兵器の名称・規格・製作年代、及びそれぞれの工房の名称・官吏・職人の姓名などがあり、前漢の皇室手工業の種類・地区分布や発展水準、経済機構の設置・管理運営体制、財政収入の状況、工房の末端管理制度等が示されている。また、前漢文字の発展規律もはっきりわかる。正式な報告書の刊行によって、漢代王朝文化の研究がさらに解明されることを期待する。

②京師倉

前漢時代の国家糧食倉庫である。

関中平野から黄河中下流の華中平野は、前漢時代の農業経済の中心区域である。しかし、長安は政治・経済・文化の繁栄した大都市であるため、前漢初年以降、毎年、関東地区(山東省の周辺地域)から食糧を長安城に運んできた。そのために漢の武帝の時、人工運河の「漕渠」が作られ、渭水が黄河に合流するところに「京師倉」を建てていた。1980~1982



第10図 漢・京師倉1号倉復原図(『考古与文物』1982-6より転載)

年、京師倉遺跡の発掘調査が行われ、京師倉は現在の陝西省華陰県礪峪郷段家村北で、当時の「漕渠」の末端に位置することがわかった。^(注12)

京師倉遺跡は、平面が長方形で、1,120m×700mであり、倉城が版築で造られ、城壁の厚さが10mある。発掘調査した1号倉は、東西62.3m・南北25m(面闊十間、進深四間)、建築面積は1,557.5m²の大型倉庫である(第10図)。出土した建築材料の中では「京師倉當」の文字瓦當が

京師倉遺跡の確認の有力な証拠となる。

③武器の倉庫

これは、前漢王朝の中央武器の倉庫である。『漢書・高帝紀』によると、高祖七年二月(B.C. 200年)、「蕭何治未央宮，立東闕，北闕，前殿，武庫」とあり、新の王莽の末年、戦火に焼き払われた。1975年以降、武器倉庫遺跡が発掘調査され、その範囲、形態などが明らかになった。平面は長方形で、東西320m・南北800mあり、壁に囲まれていた。東院は倉庫四つ、西院は三つあり、そのうち、最大の倉庫は長さ230m・幅46m、四つの庫房を持ち、ひと庫房ずつの面積は1,500m²以上である。中には武器棚の礎石がよく残っており、当時の武器棚がしっかり取り付けられていたことがわかる。出土した武器は同種品が集中しており、武器の用途によって分類され收藏されていたことも明らかとなった。^(注13)

各類の武器の材料を分析すると、前漢時代の武器は鉄製品の、刀、劍、矛、戟、鎧、鏃、銅製武器には、戈、劍、鏃などがあり、鉄製武器が銅製武器に代わりつつあったようすがみられる。それは中国古代兵器史の重要資料である。

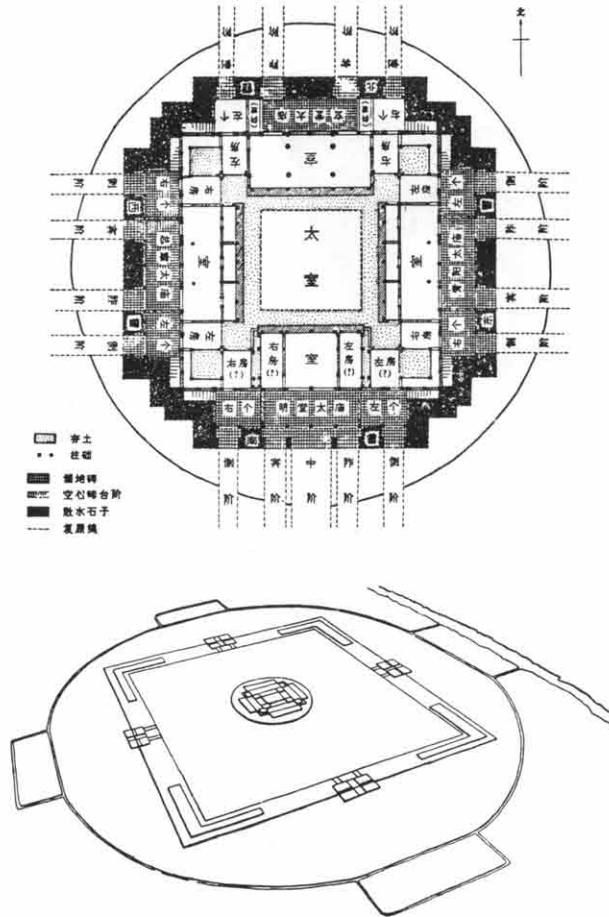
④禮制建築の「明堂」,「辟雍」

新の王莽の末年、儒教の伝統である禮制と、当時流行した陰陽五行学説により計画された宗教的色彩の濃い建物であった。遺跡は、漢長安城の安門の南東側に位置し、その平面は正方形の大庭院で、囲壁が一辺235mずつ、四面にそれぞれ門が一門ずつある。その外側にも幅2mの円形溝が取り囲んでいた。方形の庭院の中央には直径60cmの円形基台が建てられ、その上に方形の殿堂が築かれていた^(注14)(第11図)。この遺跡は規模も大きいし、建築構造も複雑であり、それは文献に「上円下方」,「外円内方」,「四面周水, 圓如壁」と記載された「明堂」・「辟雍」の建築形態と合致する。

⑤前漢の皇帝陵

前漢時代の皇帝陵は、文帝の「霸陵」と宣帝の「杜陵」が西安市の東南部にある以外、

すべて長安城の西北、渭水の北岸の高原上に並んでいる。皇帝陵墓は発掘していないので、地面上の遺跡しかわからない。調査資料によると、漢代帝王陵墓は秦の始皇帝陵をまねて造られ、版築で盛土をした巨大な方錐形墳丘を中心として、陵園が築かれた。陵園の平面が方形で城壁に囲まれ、四辺に四門を設けた。その中には寝殿と便殿が建てられ、陵側には廟を築き、供奉や祭祀を行っていた。陵園の周辺に功臣・貴族の陪葬墓が分布し、地面封土の数で試算したら、一陵の陪葬墓が70基余りになるものもある。歴代の皇帝が即位直後から「寿陵」を造り、地下宮殿の造営や葬具・豪華な副葬品などの費用は、全国の貢賦収入の1/3に当たると記載されている。



第11図 漢・長安「明堂」「辟雍」平面図
上：中心建築辺面復原図、
下：遺跡全景平面復原鳥瞰図(東南～西北)
(北京大学『秦漢考古』より転載)

漢の高祖劉邦の長陵陪葬墓である、咸陽の楊家湾大墓から出土した漢代の彩色兵馬俑は、2,548点もあり、高さは45～50cmで、武士や文官、楽人などがいきいきと装飾され、漢代文化研究の重要資料として注目されている。特に、秦代^(注15)の兵馬俑と漢代の兵馬俑は、副葬品として葬られたとき、すべて当時の軍事方陣によって並べていたので、各時代の軍事制度や戦略戦術などを知ることができる。中国古代軍事史の貴重な資料である。また、1968年、劉邦と呂後の合葬墓—長陵の東約1,000mのところ(現在、咸陽市韓家湾独家溝)で、「皇后之璽」と陰刻された印章が出土した。この印章は玉製で、一辺2.8cm・高さ2.8cmの正方形をしており螭虎の鈕を持つ。いわゆる玉璽は、天子の権力の象徴であるが、呂後の権力からすれば、その陵墓の副葬品にまちがちなかろう。



茂陵西漢鎏金銅馬

漢の武帝の「茂陵」は前漢の皇帝陵で最大の規模を持ち、陵園は東西430m・南北414m、城壁の幅が約6m、封土の底辺は260m^(注16)×260m・高さ46mである。陪葬墓の中で、匈奴と戦った功臣霍去病の墓前に装飾として造られた石刻は、芸術品としての価値も高く、「馬踏匈奴」、「猛獸食羊」、「人と熊」などの題材の作品15点は、質朴で力強く、いきいきとして、前漢時代の雄大な時代精神を表している。これは、中国の大型石刻芸術の最古作品^(注17)である。

1981年5月に、茂陵の東側にある無名の陪葬墓の1号従葬坑から、銅器を始めとして、鉄器・漆器・鉛器など230点余りの副葬品が発見された。その中、18点の青銅器には銘文が記され、銅器の名称、高さ、重さ、容量、産地、製作、あるいは売買の年月日などがはっきり読みとれる。これによって、持ち主は、「陽信家」であることがわかった。つまり、漢武帝の姉、陽信長公主であると考えられている。銘文の内容の検討によって、前漢の皇室手工業の中、青銅器生産、流通、計量などが知られる。特に、金メッキの銅馬や金銀象嵌した竹型銅薰炉はすばらしい工芸品である。鎏金銅馬は、長さ76cm・高さ62cmで、引き締まった筋骨をよく表現し、漢武帝が西域から求めたものとして有名な「汗血馬」の見本^(注18)であると考えられる。

秦漢時代(B. C. 221年～A. D. 220年)は中国歴史上に重大な意義をもつ画期的時期であり、後の二千年の中国文化にとって巨大な影響を与えている。秦漢文化の発祥や発展過程は学術界の重大な論題であり、考古新資料の発見に伴って、秦漢文化の復原が行われつつある。

(Huang Xiao Fen=中華人民共和国陝西省文物管理委員会助理研究員)

注1 陝西省社会科学院考古研究所凤翔考古队「秦都雍都遗址堪查」『考古』1963年第8期

注2 陝西省雍城考古队「凤翔马家庄春秋秦1号建筑遗址第一次发掘简报」『考古与文物』1982年第5期

注3 陝西省考古学会『陝西考古重大发现』1986年 陝西人民出版社

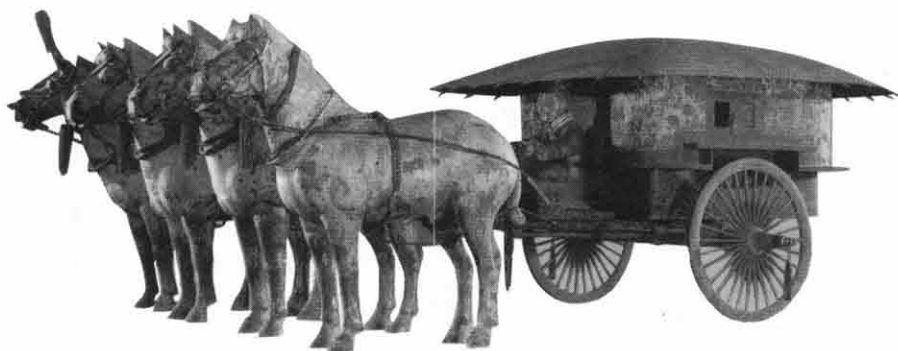
注4 黄晓芬・李晓东「秦陵园区—凤翔秦都雍城遗址之二」『中国文物世界』1986年第10期

注5 黄晓芬・李晓东「雍城秦公1号大墓—凤翔秦都雍城遗址之一」『中国文物世界』1986年第9期

注6 韩偉「试论战国秦的屈肢葬淵源及其意义」『中国考古学会第一次年会论文集』1979年

注7 叶小燕「秦墓初论」『考古』1982年第1期

- 注8 秦都咸阳考古工作站「秦都咸阳第一号宫殿建筑遗址简报」『文物』1976年第11期
注9 咸阳市文管会・咸阳市博物馆・咸阳地区文管会「秦都咸阳第三号宫殿建筑遗址发掘简报」
『考古与文物』1980年第2期
注10 注3に同じ。
注11 王仲殊『汉代考古学概说』中华书局 1984年
注12 注3に同じ。
注13 注11に同じ。
注14 注11に同じ。
注15 注3に同じ。
注16 注11に同じ。
注17 陕西省文物管理委员会『陕西名胜古迹』陕西人民出版社 1986年
注18 黄晓芬・李晓东「汉武帝茂陵出土的『阳信家』铜器」『中国文物世界』1987年第3期



綾部市・八田川上流域における古墳の変遷

—綾部市・奥大石古墳群を中心にして—

小池 寛

1. はじめに

綾部市・福知山市を中心とする「中丹波」地方の古墳時代の基礎資料は、近年の大規模な開発に伴う発掘調査によって増大する傾向にある。特に、近畿自動車道建設に伴う事前調査では、直径71m・墳丘高10mを測る私市円山古墳が調査され、畿内色の濃い遺物が出土した。この古墳の発見によって由良川流域を中心とする広域な範囲を治めていた首長像が浮かび上がり、当地における古墳時代の動態について再検討を行う必要が生じた。

丹波地方における5世紀までの古墳は、基本的に方墳が多く、このことは既に論じられているが、方墳から円墳・前方後円墳等に移行する時期については多くの意見があり、明らかな資料をもって検討されることは少なかった。

ここでは、近畿自動車道敦賀線の建設に伴って発掘調査を実施した奥大石古墳群を通し

て、方墳から円墳・前方後円墳に移行する時期について、八田川上流域の小盆地内の古墳を中心に考え、古墳の変遷についても私見を提示したい。

なお、今回の発掘調査は、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて、平成元年5月9日から同8月4日まで行った。期間中、多くの方々の御協力を得た。記して感謝する次第である。



第1図 調査地位置図

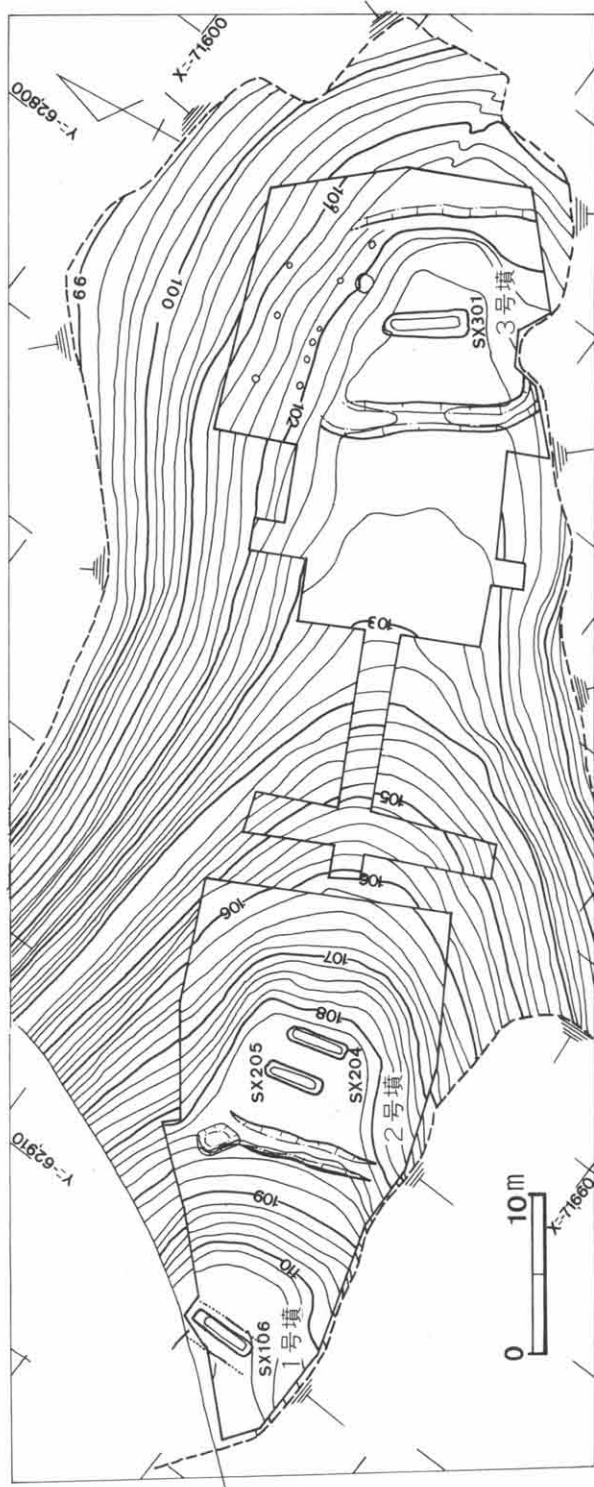
249. 奥大石古墳群 74. 上杉古墳群 92. 茶臼山古墳
134. 白田古墳 135. 狐塚古墳 138. 中島古墳群
139. 石子古墳群 203. 野崎古墳群

2. 奥大石古墳群の調査概要

奥大石古墳群は、京都府綾部市上杉町奥大石に所在する3基の方墳からなる古墳群である。高城山から北東に派生する丘陵先端部に位置し、標高は最

上位の1号墳で111m、最下位の3号墳で101mを測る。本古墳群が位置する丘陵からは、盆地を広く見渡すことができ、古墳を築造する条件は良好であると言える(第1・2図)。

(1)1号墳(第3図) 古墳群中、最も高所に位置し、標高は墳頂部で111mを測る。墳丘規模は一辺約11mで、墳丘高は2mの方墳である。墳丘は地山を整形した後40cm前後の盛土を行っている。地山直上には淡黒褐色土が間層として堆積しており、整地作業に伴う野焼きを行った可能性がある。埋葬主体部SX106は、墳頂部の中央に位置する組合式の木棺である。墓壇の主軸線は磁北とほぼ一致しており、一段目の掘形は2m×6m、二段目の掘形は1m×4mである。一段目の掘形は、墳丘盛土から切り込まれており、土色・土質の識別は困難であった。そのため南北方向については、墳頂部と墳丘傾斜面間にはしる傾斜変換線内で復原を行った。棺は0.6m×2



第2図 地形測量図および検出遺構配置図

mの規模を測り、棺床の北側部分には5~7cm大の礫を敷き、他は2~4cmの砂利を敷いている。北側の比較的大きな礫群は、砂利上面に比べ5cm程度高くなっていることから、枕としては限定できないものの頭位を表現しているものと考えてよい。木棺の木口板部は、板を固定するために北側に20cm×50cm・深さ30cm、南側に30cm×50cm・深さ30cmの壙を掘り込み、底部に黄褐色粘土を帯状に敷いている。この粘土帯は、木口板の安定をよくする目的があったと考えられ、粘土帯の厚みから7cm前後の厚みをもつ木口板であったと考えられる。二段目墓壙の北東側掘形肩部で剣と刀が1振ずつ出土しているが、棺床からの遺物は出土していない。

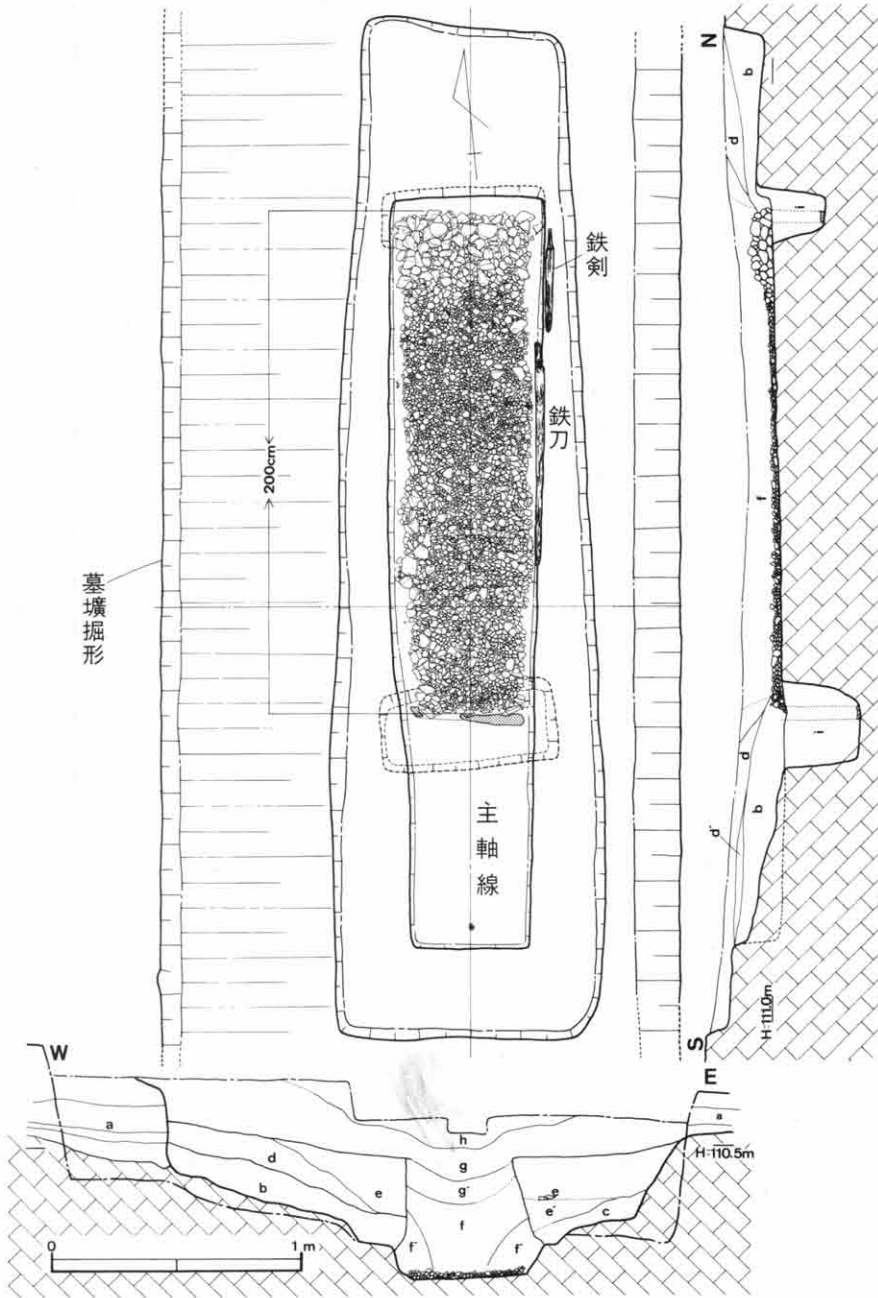
(2) 2号墳 1号墳の下段に位置する一辺11mの方墳である。墳丘は地山整形後に盛土を行っており、基本的な築造方法は1号墳と同じである。1号墳との境には溝を掘り込んでおり、最下層から土師器・器台が1点出土している。墳頂部では2基の埋葬主体部を検出した。東方に位置するSX204は、墓壙の掘形が1.3m×4.1m、棺が0.7m×3.3mの規模を有し、通有に見られる組合式木棺と考えられる。墓壙掘形北東で蛇行剣(全長70cm)・刀子、北西で鉄鏃が4点出土している。SX204の西方に位置するSX205の墓壙掘形は、0.8m×3.2mの規模を有し、棺は0.5m×3mである。棺の木口部は比較的直線的に落ち込んでいるが、両側面は緩やかに落ち込み、棺床は半円形を呈していることから割竹形木棺の可能性が高い。棺床北方では石製白玉・堅櫛・針状の鉄製品がまとまって出土し、その東側の掘形から剣が出土している。白玉等の出土状況から髪を束ねたと考えられる。

(3) 3号墳 丘陵先端に広がる平坦部に築造された一辺11mの方墳である。西方は区画を目的にした溝を掘り込み、東方は地山を直線的に削り出すことによって墳丘を区画している。埋葬主体部SX301は、掘形が1.5m×5m、棺が0.5m×3.6mの規模である。墓壙内から遺物は出土しておらず、腐食しやすい副葬品があったと考えられる。

3. 築造年代と奥大石古墳群の性格について

築造年代設定の根拠になる出土遺物は僅少であるが、1・2号墳の境に掘られた区画溝内から土師器・器台が1点出土している。脚部のみの出土ではあるが、布留式併行期でも新しい段階に比定できる。2号墳の埋葬主体部SX204から出土した蛇行剣(第4図)は全国で40余例確認されており、畿内周辺地域は、豊中大塚古墳や北原古墳にみるように5世紀前半段階の副葬品が多い傾向にある。また、SX204から出土した鉄鏃(第5図)は、無茎重扶平造三角形式で二重の腸袂が付くものと無茎平造長三角形式の2種がある。

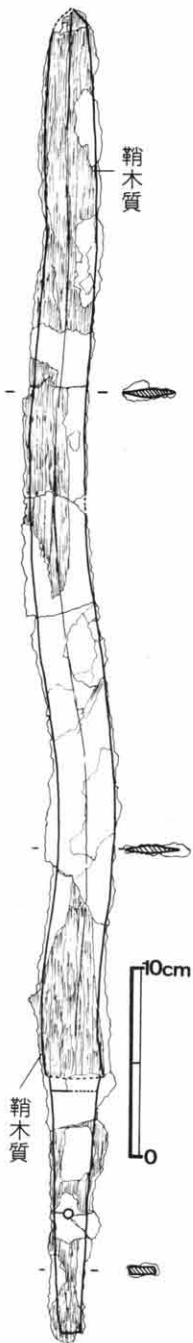
1号墳の埋葬主体部SX106は、組合式木棺であり棺床に礫を敷いている。周辺では福知山市ヌクモ2号墳等に類例を求めることができ、また、分布が山陰地方に多いことが指摘



第3図 1号墳SX106実測図

- a: 墳丘盛土 b: 濁暗茶褐色土 c: 暗茶灰褐色土 d: 暗茶褐色土(礫含む)
 e: 濁茶褐色土 f: 暗茶褐色土 g: 暗茶灰褐色土 h: 濁灰褐色土 i: 木口板掘形

されている。これらは5世紀前半に比定できる資料が多く、本古墳の築造時期を考える上で、重要な根拠になろう。



第4図 2号墳SX204
出土蛇行剣実
測図

以上の諸類例から勘案すれば、奥大石古墳群は5世紀に築造されたと考えてよく、さらに細かく時期設定をすれば、5世紀でも前半期と考えるとよい状況にある。

出土遺物の中で蛇行剣は出土例の少ない遺物として注目できる資料である。蛇行剣については楠本哲夫氏^(注2)によって基本的な集合作業が行われ、現時点で37遺跡42点を数える。府県別で見ると宮崎県に10遺跡10点確認されており、鹿児島県出土例を合わせると15遺跡17点になる。他の九州出土例を合計すれば21点を数え、全国出土点数の半数を占めている。本州においては、兵庫県を含む近畿で8遺跡10点出土しており、近畿以北で5遺跡6点、中国・山陰地方では4遺跡4点出土している。副葬された時期は、九州例の大半が地下式横穴から出土していることから6世紀段階に比定でき、本州例は5世紀段階が多い傾向にある。一方、蛇行剣の出土は、基本的に日本に限られるが、大韓民国全羅北道任宝郡館林面金城里に所在する金城里石槨墓群A号墳から1点出土している^(注3・注4)。この蛇行剣については出土点数の大半が日本であることから日本製と考えられている。

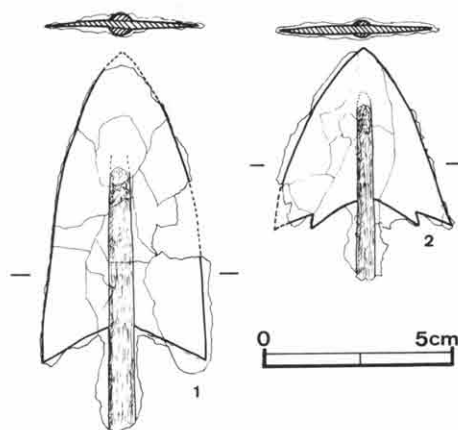
蛇行剣は、形状から見て実用武器とは考えられず、祭祀に関係する遺物として認識されている。多くの解釈があるが、その中においてシャーマニズムとの深い結び付きを指摘する見解もある^(注4)。しかし、蛇行剣の出土をもって古墳の被葬者の性格を規定することは現状ではできず、蛇行剣のもつ意味については考古学的手法以外からも考察する必要があるだろう。

奥大石古墳群が所在する小盆地は、綾部・福知山を中心とする内陸側と舞鶴を中心とする日本海側を結ぶルートの中継点として古代から重要な地であったと考えられ、古墳の被葬者は、そのような地理的条件と深く係わった人物であったと考えられる。また、蛇行剣の出土もそのような地理的背景と少なからず関連があるものと考えておきたい。

4. 周辺地域における古墳の変遷について

奥大石古墳群が所在する小盆地は、八田川流域の最も北方に広がり、盆地の範囲は東が上杉町、北が高槻町、西が七百石町、南が梅

迫町にまで及んでいる。しかし、広域な盆地ではなく、高槻町を中心にあたかも放射状に平坦地が続いている感がある。その盆地には前方後円墳が4基、円墳が30余基、そして、本古墳群の方墳が3基所在する。円墳については、大半が古墳時代後期に築造されたと考えられ、奥大石古墳群とは時期的に開きがあるため説明を割愛し、4基の前方後円墳と2基の円墳から構成される政次古墳群について概観しておきたい。



第5図 2号墳SX204出土鉄鏃実測図

○高槻茶臼山古墳 高槻町に所在する全長54mの前方後円墳で、後円部径34m、前方部幅30mを測り、墳丘は2段築成である。墳丘からの埴輪・葺石は確認されていないが、表採された須恵器には、陶邑編年TK23ないしTK47前後に比定できる資料があり、築造時期を5世紀末に比定できる。

○上杉1号墳 梅迫町に所在した全長50mの前方後円墳である。詳細な記録がなく、築造時期を確定できる根拠を欠くが、埋葬主体部が横穴式石室である可能性が高く、円筒埴輪・人物埴輪が採集されている点等から考えて6世紀中葉を前後する時期と考えられる。

○中島1号墳 上杉町に所在する前方後円墳とされるが、現状から墳丘規模等詳細な点については不明である。円墳である2号墳から須恵器の出土が伝えられている。

○野崎5号墳 高槻町に所在した全長26mの前方後円墳である。後円部径19m・前方部幅13mを測る。墳丘は後世に削平され残存しておらず、埋葬主体部の構造は不明である。周溝内から須恵器が出土しており、陶邑編年TK47前後に比定できる。

○政次^(注5)1号墳 七百石町に所在する直径40mの円墳である。埋葬主体部は2基確認されており、第1主体部の墓壇掘形は2m×8.36m、棺は0.8m×6.9mの規模を有し、第2主体部の墓壇掘形は1.5(2.1)m×6.3m、棺は0.85m×5mの規模を有している。第1・2主体部から剣が各々1点ずつ出土しており、第2主体部から土師器・高杯が1点出土している。埋葬主体部に須恵器の副葬が見られないことと、土師器の形態から5世紀前半頃の築造と考えられている。

このような古墳群の中にあって奥大石古墳群は、当地で確認された方墳としては初出であり、また、最古の古墳群と言わざるを得ない。しかし、奥大石古墳群の墳丘規模や埋葬主体部、副葬品を見れば先行する古墳の存在は十分考えられ、今後の分布調査や発掘調査によってその存在が確認されることと思う。

(1) 5世紀前半の古墳変遷について

奥大石古墳群は、事実報告で述べたように5世紀前半の築造であるが、本古墳よりやや遅れて七百石町に政次古墳群が築造される。円墳2基から構成され、主体部の棺床には赤色顔料が塗布されている点など奥大石古墳群との相違点が多い。綾部市では、成山古墳群や久田山古墳群が4世紀代に築造され、福知山市では、豊富谷丘陵内古墳群が4世紀初頭を前後する時期から築造されるが、規模に違いはあるものの基本的には方墳を主体としている。これらの方墳は、弥生時代に成立した方形台状墓の系譜を引いており、伝統的な墓制を踏襲している点から考えて、在地勢力の自立的発展に伴って成立したものと解釈できる。しかし、政次古墳群のように従来の墳形を踏襲せず、規模が大型化している古墳の出現は、何らかの社会的変質を意味しているものと考えてよい。同時期における綾部・福知山の古墳は、5世紀中葉まで奥大石古墳群に見られるような方墳を主体としているが、その中において福知山市広峯15号墳は前方後円墳であるとともに、三角縁神獣鏡を保有している点などから方墳群とは性格が異なると考える必要がある。しかし、墳丘の築造は大半が地山削り出しであることや墳丘規模が小規模であることから、大和との関係は肯首できるものの、小地域社会を基盤にした首長像を想起せざるを得ない。

一方、綾部市菖蒲塚古墳は、一辺32mの方墳であり、平野部に立地している。また、3段築成で埴輪(川西編年Ⅱ～Ⅲ期)を有していることから、5世紀初頭に比定できる首長墓と言えらる。この古墳に続いて築造された聖塚古墳は、一辺54mを測る方墳で、立地は菖蒲塚古墳と同じく平野部である。埴輪(同Ⅲ期)から5世紀前半に築造されたと考えられる。当該地域において同時期の卓越した古墳が見られないことから、両古墳が由良川中流域に勢力基盤をもった大首長の奥津城と考えられ、墳形が方墳であることに大きな特徴があると言えらる。両古墳の存在は、大和政権が、各地域の大首長を介在にして地域支配を行っていたことを意味している^(注6)と考えておきたい。

このような方墳から円墳への移行は、古墳群内においても確認できる。福知山市に所在するヌクモ古墳群は、一辺30mの方墳である1号墳に続いて一辺10mの方墳である2号墳が築造されたとの所見が提出されているが^(注7)、1号墳を実見した限りでは、南東部墳丘傾斜面は方墳を意識した稜線がなく、墳頂部と墳丘傾斜面間に走る傾斜変換線は円形を呈していること、そして、墳丘北西部は、旧地形ないし崩落によるものと考えられ、人為的な墳丘整形は肯首できないことから、直径30mの円墳とする方が蓋然性が高いと考えられる。また、築造時期についても1号墳から出土した鉄銚は、出土した時点では柄の装着部の袋状基部が円形と考えられていたが、鉄錆を落とした段階で基部の断面が八角形を呈していることが明らかになった。鉄銚の編年的研究を進めている臼杵 勲氏^(注8)によって、基部が八

角形を呈するのは5世紀中葉以降に多いことが判明しており、1号墳の築造時期を決定する遺物がない現状では、鉄銚の示す年代を築造時期とすべきである。また、2号墳の埋葬主体部は、奥大石1号墳と同じように棺床に礫を敷いており、類例を検討すれば5世紀前半に多いことが指摘できる。これらの点から編年表に表したようにヌクモ2号墳が5世紀前半に築造され、続いて1号墳が築造されたと考えられる。

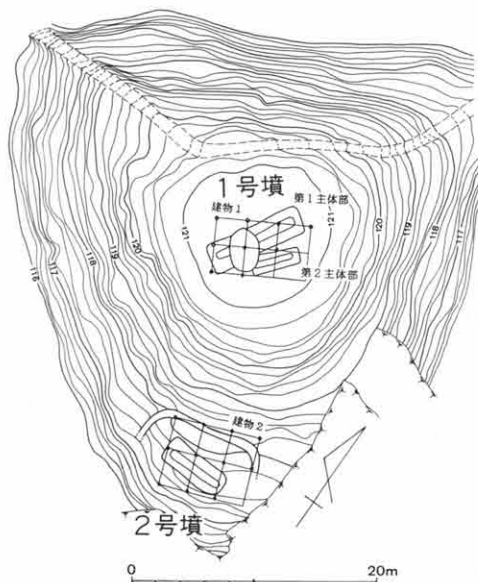
奥大石古墳群と政次古墳群のように、古墳群を一単位とした場合においても方墳から円墳に移行することが一現象として捉えられたことが明らかになったが、同一丘陵内に所在する古墳群においても墳形の移行が認められることは、5世紀前半に何らかの政治的变化が小地域内まで浸透したことを示唆しているものと解釈できる。

付表 主要古墳編年表(案)

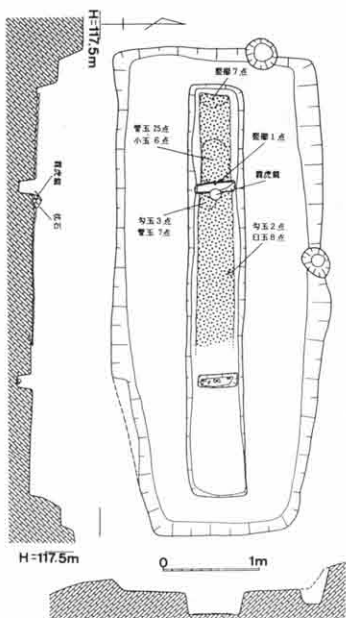
時期 年代	上杉町周辺の主要古墳				綾部市・福知山市の主要古墳		他地域の主要古墳 河内・大和・山城等
	上杉町	七百石町	高槻町	梅迫町	綾部市	福知山市	
300					成山	豊富谷丘陵	椿井大塚山 元稻荷
400	奥大石	政次			久田山 菅浦塚 殿山 聖塚	高田山 ヌクモ塚 中坂	津堂城山 久津川車塚 ウワナベ
500			茶臼山		沢3号 私市円山	妙見	大仙陵
600	焼森	八幡宮	野崎	上杉 石子	田坂野 以久田野	奉安塚 長尾 高龍塚	今城塚 見瀬丸山

(2) 5世紀後半以降の古墳変遷について

奥大石古墳群が所在する小盆地内において5世紀中葉から後半にかけては、現在のところ古墳を見出すことはできないが、5世紀末には前方後円墳である高槻茶臼山古墳が出現する。中丹地域に所在する前方後円墳の中では比較的規模が大きく、政次古墳群に続く



第6図 ナクモ古墳群測量図(注7から転載)



第7図 ナクモ2号墳主体部実測図(注7から転載)

首長墓と考えることができる。しかし、由良川一帯を勢力基盤にした首長の墓とは考えられず、むしろ、小地域の首長墓であった可能性が高い。墳丘規模が比較的大きい要因としては、当地が内陸部にとって交易等で重要視されていたことと無関係ではないと考えられる。一方、茶臼山古墳が出現する以前に綾部では、私市円山古墳が築造される。私市円山古墳は、第1主体部と第2主体部に時期差を認めなければならないが、墳丘の成立時期は、硬質埴輪が樹立されていることから5世紀中葉以降と考えられる。円山古墳で出土した遺物群は、畿内との関係に

おいてもたらされたことが十分考えられ、また、埴輪・葺石・段築が完備されていることから、聖塚古墳に続く首長墓の系譜として理解することができる。しかし、この時期に通有に見られる前方後円墳ではないことと墳丘の大半が削り出しによっていることに大きな特徴を見出せる。円山古墳を中心に考えた場合、円山古墳を頂点とする地域支配体制が大和政権との関係においてより明確になったことを示唆しており、現時点では、他に卓越した古墳がみられないことから、綾部・福知山の広い地域を拠点にした首長であった可能性が指摘できる。6世紀に入ると前方後円墳を含む野崎古墳群が成立する。この古墳群は、先述した高槻茶臼山古墳に続く小地域の首長墓と考えられるが、綾部・福知山地域でも見られるように前方後円墳の小型化が進む時期でもある。おそらく、

中期に見られた在地首長を介在にした地域支配体系が崩壊し、小地域の首長を直接的に支配する形態に移行したと考えられる。6世紀も後半になると焼森古墳群や八幡宮古墳群等の小円墳を中心にした群集する古墳群が築造されるようになるが、以久田野古墳群や栗ヶ丘古墳群に見られるような大規模なものではなく、7世紀前半まで築造された「小群集墳」を最後に造墓行為は行われなくなる。この現象は、由良川流域においても同様である。

5. ま と め

今回、調査を行った奥大石古墳群は、3基からなる小型の方墳群であるが、八田川上流域の小盆地においては初例であり、当該地における古墳時代の動態を考える上で一定の評価を得られる調査例になった。また、京都府内初出の蛇行剣は、全国的に見ても分布範囲が限られる遺物であり、蛇行剣のもつ意味を考える上で一つの類例を追加できた。奥大石古墳群が所在する八田川上流域の小盆地は、本文でも述べたように内陸部と日本海を結ぶ中継点として要衝の地であったと考えられるが、その地に奥大石古墳群→政次古墳群→高槻茶臼山古墳→野崎古墳群→上杉古墳群の順序で首長墓が築造されたことは、内陸部における小盆地の重要性を傍証しているのではないだろうか。なお、付表の主要古墳編年表は、大半の古墳を割愛して作成した。空白の多い表になったが、全体のながれを把握する上では有用であると考えている。^(注9)

最後に、本文作成にあたり次の方々から有益な御教示を賜った。記して深謝する次第である。

楠元 哲夫, 泉 武, 日野 宏, 橋本 稔, 中村 孝行, 近沢 豊明,
平良 泰久, 松井 忠春, 小山 雅人, 竹原 一彦(敬称略・順不同)

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第2係調査員)

- 注1 常盤井智行「由良川中流域の古墳の動向」(『丹波の古墳』I 山城考古学研究会)1983.12
 注2 楠元哲夫『北原古墳』(『大宇陀町文化財調査報告書』第1集 大宇陀町役場)1986.10
 注3 全榮夾「任實, 金城里石槨墓群」(『全北遺蹟調査報告』第3輯 全羅北道博物館)1974.12
 全榮夾「蛇曲剣에 대하여」(『考古美術』129・130 韓國美術史學會)1976.6
 注4 西谷正「日向の古墳文化における大陸系要素」(『えとのす』第32号 新日本教育図書)1987
 本間恵美子他『古代の女性』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館 1988.10
 注5 長谷川達「政次1号墳発掘調査概報」(『綾部市文化財発掘調査報告』第8集 綾部市教育委員会)1981.3 37P~49P
 注6 和田晴吾「南山城の古墳」(『京都地域研究』Vol.4 立命館大学人文科学研究所)1988.11
 注7 竹原一彦「ヌクモ古墳群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第33号 財京都府埋蔵文化財調査研究センター)1989.9
 注8 臼杵勲「古墳出土銚の分類と編年」(『日本古代文化研究』第2号 PHALANX)1985.12
 注9 参考文献については、主要なもののみ掲載した。また、編年表作成にあたり(注1)の文献を参考にした。

長沙銅官窯模倣須恵器について

伊野近富

1. はじめに

1985年に実施された京都府亀岡市篠窯跡の発掘調査によって、特異な形態の須恵器壺が検出された(第3図46参照)。この形態は、平城京や長岡京で出土する須恵器の系統をひくものではなく、全く突然に出現したものと認め得る。つまり、これは日本で自然発生的に出現したのではなく、他地域からの影響下に作られたと考え得る。

そのような目で諸外国の製品をみてもと、中国湖南省長沙市の長沙銅官窯製品にもっとも類似しているといえる。

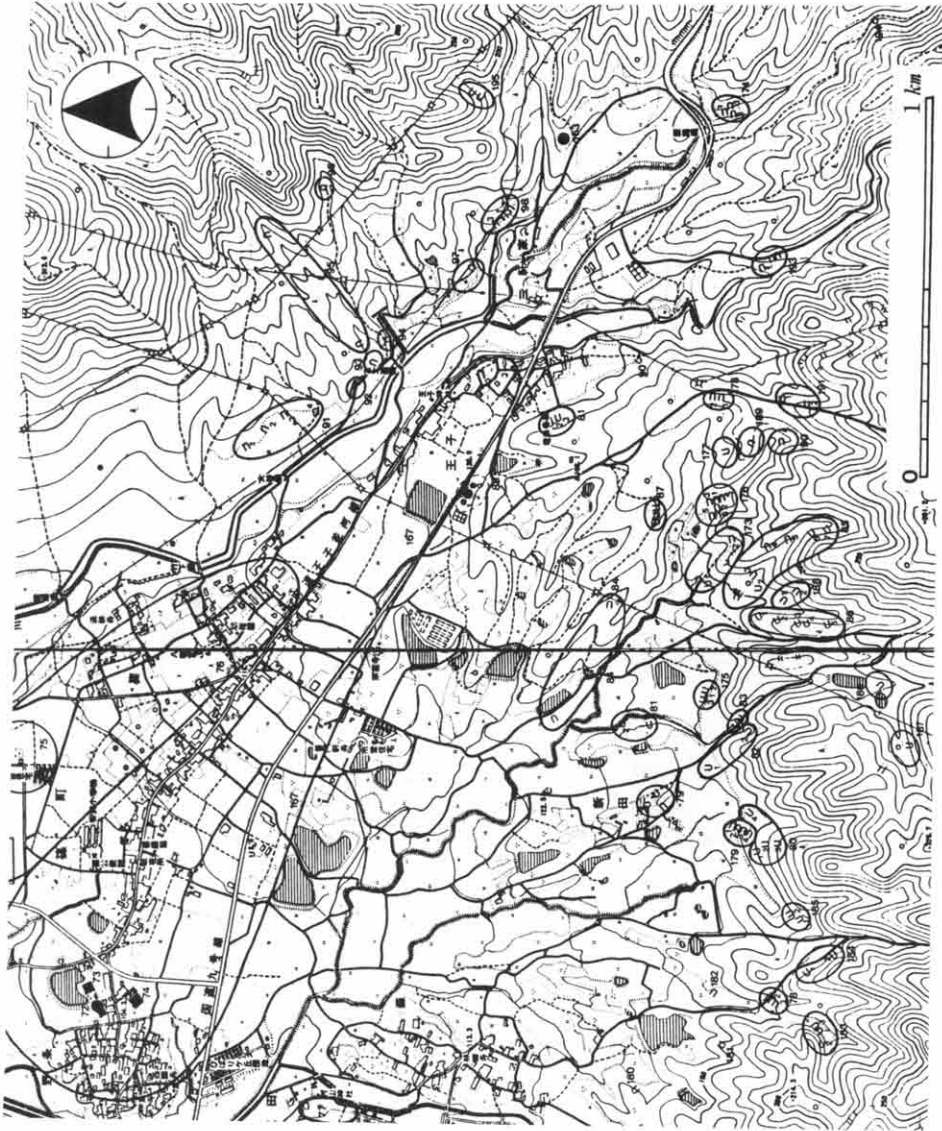
本稿では、篠出土のこの製品が、長沙銅官窯模倣須恵器であることを明らかにし、その後、生産者の問題や需要者について述べたい。では、当製品について基礎的事実を把握することから始める。

2. 袋谷窯跡群^(注1)

篠窯跡群の中で、現在までのところ、この形態の須恵器壺が出土しているのは、袋谷窯跡群のみである。この窯跡は、亀岡市篠町森前山にある。筆者がかつて設定した窯跡のブロック^(注2)では、西端のAブロックに属している(第1図)。付近の地形は、南側の山地から北へ舌状に張り出す丘陵が複雑に分岐しており、窯はその西側斜面に築かれている。

窯体は、半地下式窖窯で、窯壁にはスサ入り粘土を貼りつけている。窯体の主軸方向はN-104°10'-Eである。焚き口部は残存せず、他も部分的に残存するのみである。残存長は約4.7m、床面最大幅は約1.2m、焼成部の床面傾斜角度は23度である。焼成部の途中までは同様の角度をとるが、燃焼部との境から上方約1.9mからは38度となる。また、煙道部のそれは41度である。

なお、半地下式窖窯の窯体構造を分類した立花正寛氏^(注3)によると、B群となる。B群とは前代のA群に比べ煙道部が長くなり、傾斜も緩やかになっており、特に煙道部の形状が焼成部よりしぼり込むような形を呈し、煙道部としての機能を果たしている。したがって、窯の焼成における操作が簡単になり、A群に比べ蓄熱率も高まり、燃料消費率も低くなるタイプと推定している。

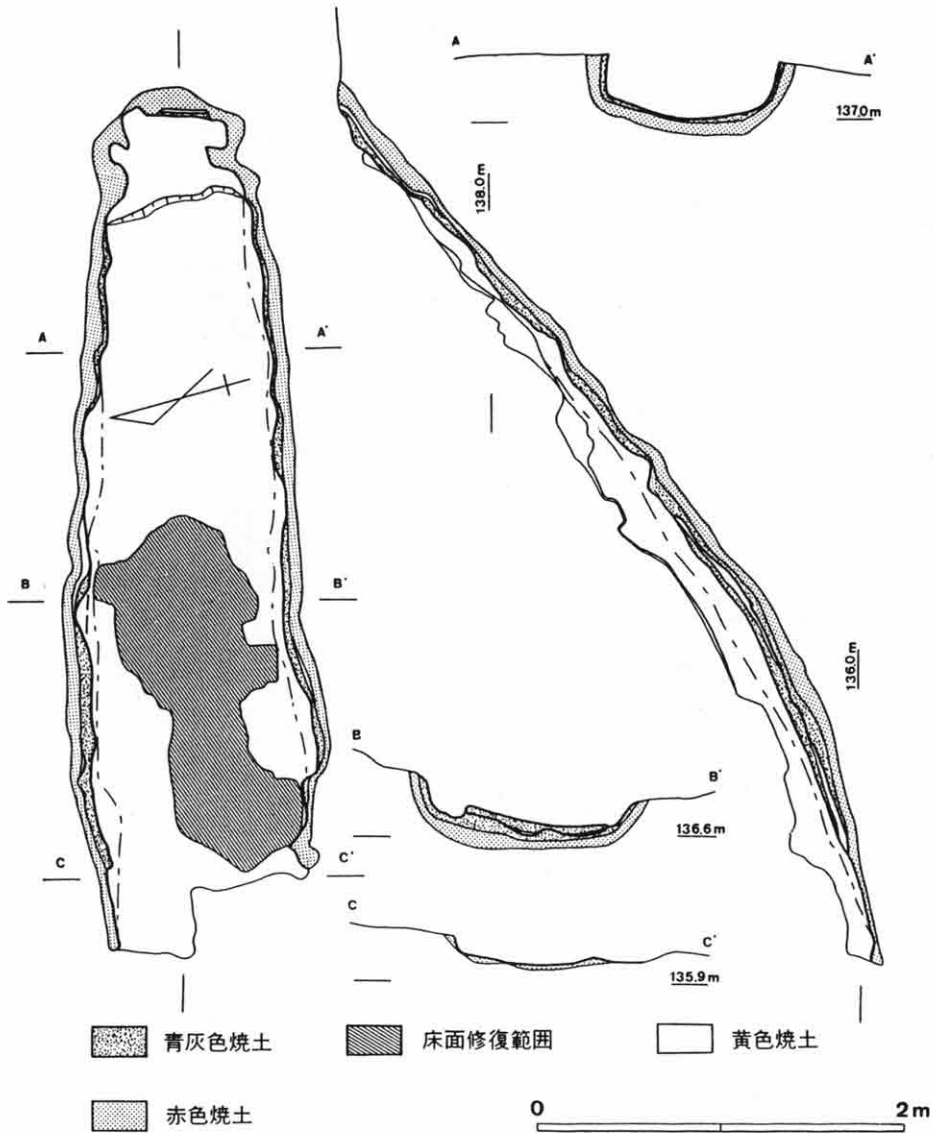


第1図 篠窯跡群分布図(181が袋谷窯跡)
(拠. 京都市遺跡地図第3分冊)

出土品

今回注目するのは、第3図46の須恵器壺である。これは、短く直口する口縁部に、ずんぐりとした体部をつけたもので、底部付近が最大径となっている。頸部から把手がつき、不確実だが、注口もつくと思われる。体部は全面ロクロナデで、底部外面はナデである。

これ以外の製品について若干述べると、平城宮分類^(注4)にいう須恵器杯A(以下同様)、杯Bとその蓋(但しつまみなし)、壺Aの蓋、壺L、鉢D、盤A、二面硯などがある。これらの須



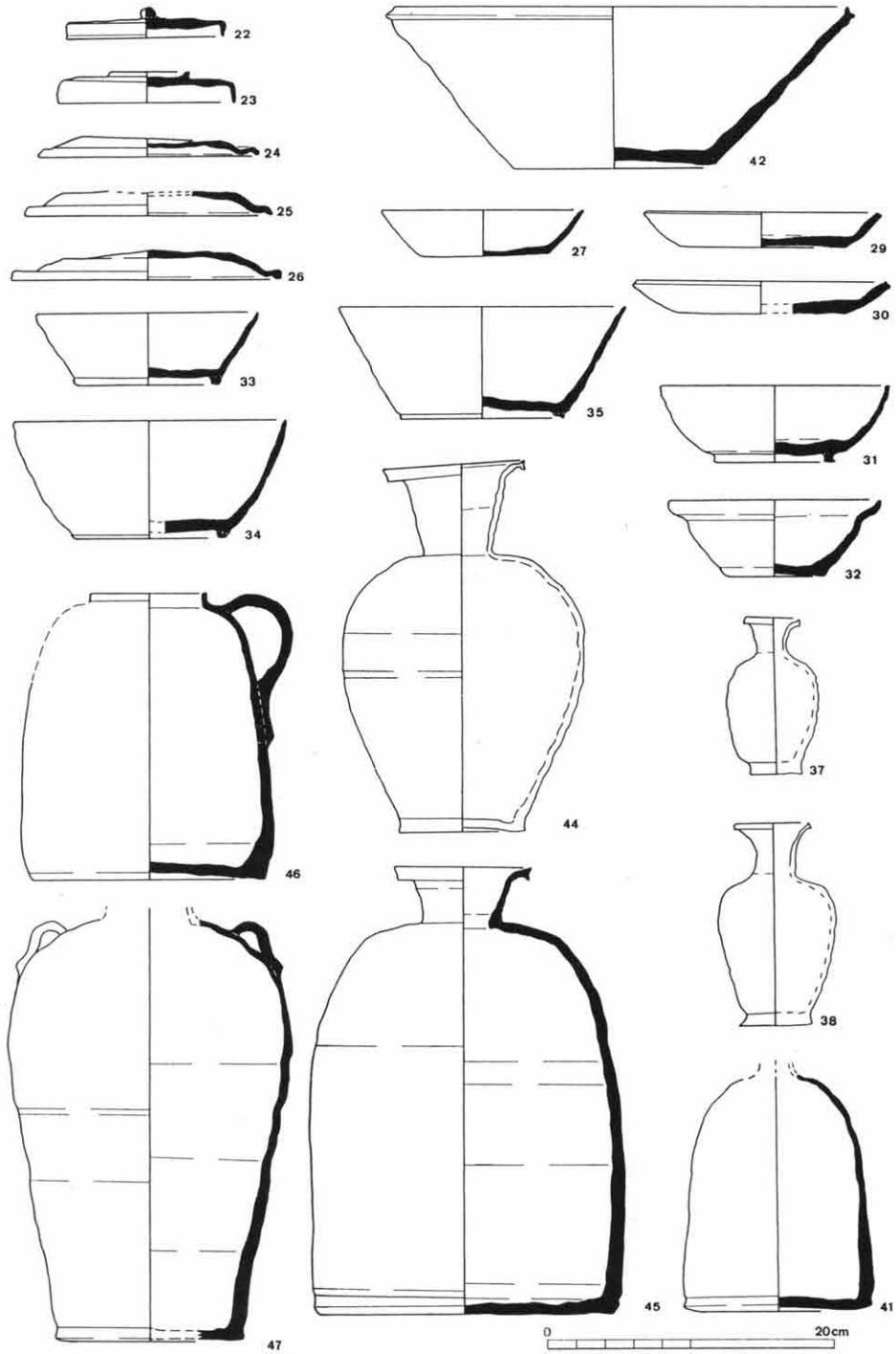
第2図 袋谷1号窯実測図(拠. 注1文献)

恵器は、現在のところ9世紀中頃と考えている。

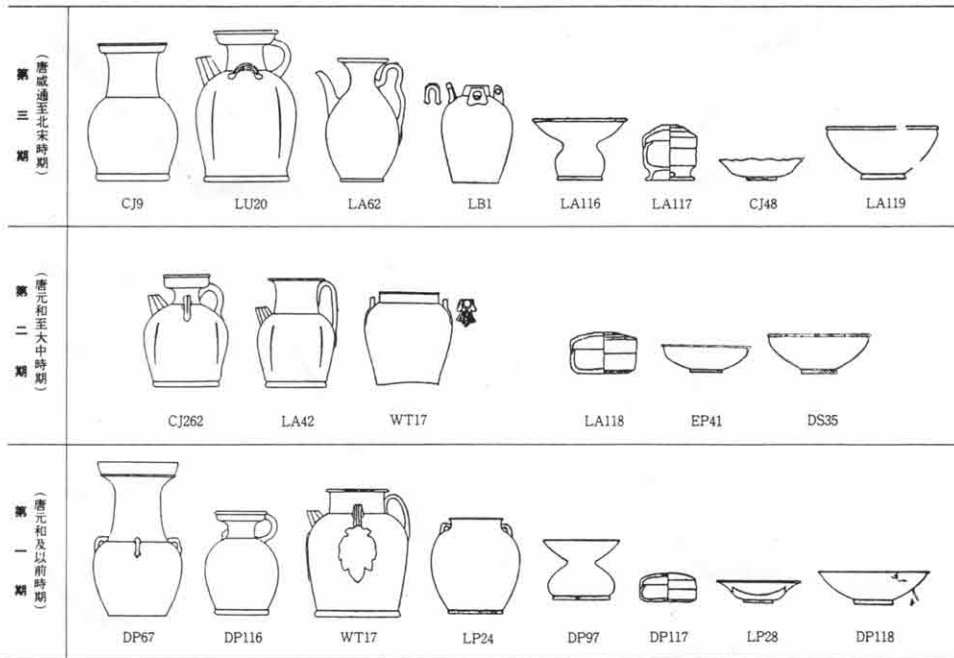
3. 長沙銅官窯

長沙銅官窯は、湖南省長沙市望城縣銅官鎮にある。1956年に発見されたもので、古代の文献には見当たらないものである。^(注5)

李知宴氏によれば、従来は単なる推定から唐の晩期時代とされていたが、氏によれば、隋か唐初期に操業が開始され、9世紀以降、唐の憲宗皇帝の元和(806~821年)以降発展し、



第3図 袋谷1号窯出土遺物(拠. 注1の文献)



第4図 長沙銅官窯製品の編年図(拠. 注5b文献)

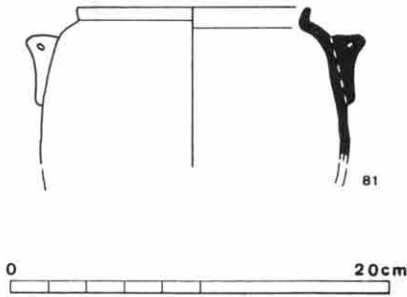
北宋の中期頃廃絶したという。

第4図が『考古学報』に記載された銅官窯各期の典型的遺物である。李氏によれば、9世紀の製品は質もよく、青釉の色調が一定している。また、白釉・緑釉、緑釉に近い藍釉もあり、素地の焼きも悪くない。9世紀初頭から中葉にかけて、下絵付けや上絵付けの彩画がはやり出した。そして、9世紀中葉から10世紀中葉にかけて、画面の趣向は写実から詩的な描写にかわるという。

4. 長沙銅官窯製品の輸出

銅官窯製品の輸出については、三上^(注6)次男氏や馮^(注7)先銘氏によって研究されている。特に三上氏によれば、「生産地の中国では紹介されることの少ない陶磁器であって、かえって中国以外のインドネシアや遠いエジプトとかイランで発見されており、(中略)長沙窯といわれる一般の中国陶磁器と少し変わった色とデザインをもつものが、この地方での輸出向けのために使われたことも知る」ことができるとしている。つまり、この製品は西アジアを大いに意識した製品であると考えている。

さて、我が国での出土状況はどうであろうか。『考古学報』の第1期WT17製品は、体部上半に貼付文を施した黄釉褐彩三耳水注であるが、このタイプの製品が、石川県小松市



第5図 前山窯出土須恵器

が、久留米市山本西谷火葬墓第1号で出土している。

わずかな出土例から判断するのは危険であるが、日本において目立つタイプは第1期WT17、つまり黄彩褐彩貼付文水注タイプであり、これが当時の人々に珍重されたことは出土地をみても、想像に難くない。実は、篠窯出土の須恵器壺(第3図46)は、このタイプの模倣なのである。図のとおりプロポーションが似ていることと、器高が約20cm程度と規格が同様であることによる。このタイプは第2期になるとLA42のように、底部近くの径が前代に比して狭くなるようである。また、第1期LP24の系統は、第2期WT17に続き、第3期LB1となるようであるが、これについては、篠窯の中では前山2・3号窯の壺(第5図)^(注9)が、その模倣ではなかろうか。篠の場合、この製品は10世紀前半代が初見である。

5. 模倣について

ここで模倣について確認したい。模倣には大きくみて次の2種類がある。それは、同じ材質で模倣するもの(模倣Ⅰと呼称)と、違う材質で模倣するもの(模倣Ⅱ)である。そして、模倣Ⅰの中には、同じ技術(技法)によるもの(aと呼称)と、そうでないもの(b)とがある。当然、もっとも原型に近い模倣がⅠaとなり、もっとも遠いのがⅡbとなる。今回は、磁器と須恵器という材質の違いがあるので、篠のそれは模倣Ⅱに分類でき、技術的にはどちらも回転作用を利用しているので模倣Ⅱaに分類できる。

蛇足であるが、ここで言う模倣とは単なる真似だけではなく、ある社会的流行のもとに産出された製品を、その流行の波及した他地域で真似て生産したものと規定しておく。

6. 篠窯と長沙銅官窯

以上のように、篠窯のそれは模倣Ⅱaに分類ができ、材質は違うが成形技術やプロポーション、規格に著しい類似性を認めることができる。しかし、以下の点で両者は大きな開きがある。それは口縁部の形態である。長沙の場合は、例えば器高20cmの場合、口縁部

八幡浄水寺遺跡、福岡県福岡市南区柏原M地区、
同県太宰府市観世音寺不丁官衙跡、京都市中京
区右京四条二坊遺跡、奈良市西ノ京薬師寺西僧
房など8か所^(注8)で出土している。

また、『考古学報』の第2期CJ262や第3期
LU20タイプ—いわゆる青磁褐彩水注—のもの
が、筑紫野市武蔵大門付近にあり、同じく第1
期LP24タイプ—いわゆる青磁褐彩壺—のもの

高1.5cmで直立し、端部を外側に折り曲げているのに対し、籐の場合は、口縁部高は0.8cmと極端に短く、端部も直立するのみである。

これによって、長沙とは直接関連がないと言われるかもしれないが、この点については以下のように考える。

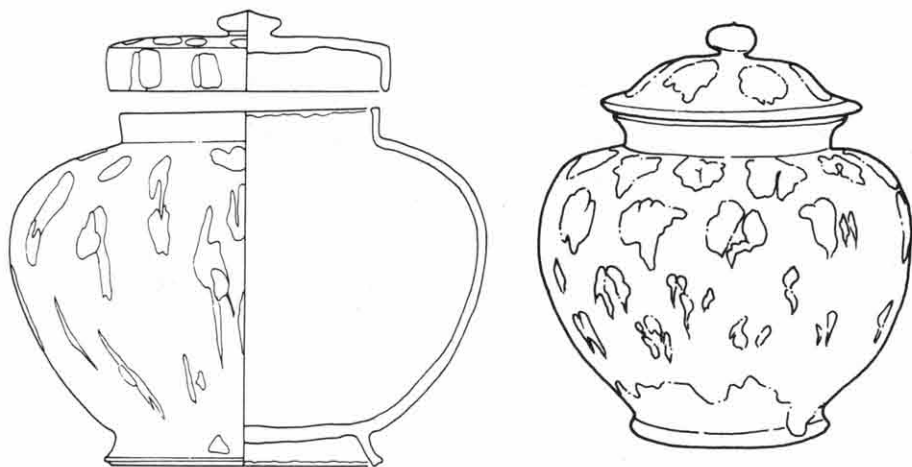
実は、このような相違は、奈良時代の唐三彩と日本の奈良三彩との間にもあるのである。

^(注11)
第6図がこの相違を対照したものである。

^(注12)
田中塚氏の説明によると、奈良三彩と唐三彩のいずれにも多い壺形でみると、同じように胴が丸く張った壺ではあるが、唐三彩では口縁部が上端で外へ曲げられて広がり、蓋がその内側にはめ込むようにかぶせる形になっているのに対し、奈良三彩では、口縁部は直立し、蓋はその口縁部の外からおおう、かぶせ蓋状になる。この手法が共通するのは須恵器である。つまり、須恵器工人が奈良三彩を生産したことになる。

したがって、田中氏のいうように直口するタイプが須恵器工人を表現したものとすれば、既に8世紀の奈良三彩に具現された中国模倣タイプが、9世紀中葉の袋谷窯跡群に、さらに10世紀前半の前山2・3号窯跡にまで継承されたといえる。そう考えると、須恵器工人達は蓋をかぶせる壺群と、そうでない壺群(平城宮分類の壺Lなど)の区別を厳然と理解していたことになる。

以上のような下地があって、10世紀前半の籐では緑釉陶器が生産される。いわば中国模倣の伝統の上に立って生産されたといえよう。しかし、それは籐でかつて奈良三彩を製造していたという意味ではなく、中国模倣製品を要望する貴族層を中心とした一部の需要に応えた須恵器工人—おそらく官営工房を形成した—が連綿として、それらの工人が関与し



第6図 左. 奈良三彩(s=1/4), 右. 唐三彩(通高23.8cm)

たことによって緑釉陶器が生産されたのである。そして、元をただせば、9世紀中葉の袋谷窯跡段階まで、それは辿ることができ、この時期に篠が官営工房の関与を受け、平安京の需要を受ける体制を整えたとも考えられる。

かつて、西弘海氏が有名な「土器様式の成立とその背景」^(注13)の中で指摘された9世紀の姿として、晩唐の越州窯系磁器の影響による〈磁器指向型〉を想定されたが、私の考え方からすれば、壺形製品については、むしろ(すべてではないにしろ)長沙銅官窯の製品を模倣したと見なし得る。また、碗・皿に関しても越州窯青磁を同様の器形を製作しているので、晩唐の越州窯青磁のみ、もしくはそれ主体の指向ではなく、9・10世紀は長沙銅官窯と越州窯の双方を指向した時期と把えたい。

なお、編年観について若干述べておきたい。篠袋谷窯跡群は9世紀中葉に考えており、原型のある長沙銅官窯第1期は、李知宴氏によれば元和(806～821年)頃といい、10世紀前半と考えている前山2・3号窯製品の原型は、同第2期唐元和至大中(806～859年)頃とされており、両者の編年は30～50年ほど違っている。篠の方が新しく考えているわけだが、当時中国と同時に変遷したとは言えないが、一世代以上の差をもって、彼我の地が同様に変遷したと考えることも合理的でなく、現在の平安京調査の進展からすれば、李氏の編年を下げるべきと考える。

7. ま と め

今回提示した点を再確認すると以下のようになる。

9・10世紀の篠窯製品の中には、越州窯指向だけではなく、長沙銅官窯指向のものもあった。このような磁器指向型は、口縁部および蓋に注目すれば8世紀の奈良三彩まで求めることができ、須恵器工人については金属器指向だけではなく、磁器指向が(特殊品ではあるが)既にあり、この伝統のもとに一部の須恵器製品や緑釉陶器が篠で生産されたと言える。

つまり、一見複雑に分類される壺形須恵器も、口縁部形態に注目すれば、何を模倣したのか判断がつくのであり、今回は、その中で長沙銅官窯製品を抽出したのである。

当時供給者である須恵器工人は、需要者である平城京～平安京居住者を中心にした人々の要請によって模倣製品を生産したわけであるが、その際蓋については模倣せず、独自のものとした。このかぶせ蓋の祖型は朝鮮半島に求められ^(注14)、須恵器の技法が、日本に伝来された後も、交流のあったことを窺わせている。かぶせ蓋に固執したのが需要者が供給者が即断はできないが、需要者としては、より原型に近いものを求めるはずであり、この点からすれば、供給側に何らかの意図を感じる。今後、この点も追求していきたい。

なお、年代観については、より整合性のあるものにするために、あえて言及したが、これも今後追求してゆきたい。

(いの・ちかとみ=当センター調査第2課調査第2係主任調査員)

- 注1 a. 岡崎研一「(4)袋谷1号窯」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 勅京都府埋蔵文化財調査研究センター)1986
b. 水谷寿克・石井清司・引原茂治・岡崎研一・立花正寛・広岡公夫・藤沢真澄「篠窯跡群Ⅱ」(『京都府遺跡調査報告書』第11冊 勅京都府埋蔵文化財調査研究センター)1989
- 注2 伊野近富「丹波・篠窯の終焉」(『中近世土器の基礎研究』Ⅲ日本中世土器研究会)1987
- 注3 注1文献bによる。
- 注4 『平城宮発掘調査報告Ⅻ』奈良国立文化財研究所 1972
- 注5 a. 『長沙銅官窯』美乃美・上海人民美術出版社 1982
b. 李知宴「越窯と銅官窯磁器の発展と輸出」(『貿易陶磁研究』No.2日本貿易陶磁研究会)1982
- 注6 三上次男『陶磁の道』岩波新書 1969
- 注7 馮先銘「元以前我国磁器銷行亞洲的考察」(『文物』1981年6期)文物出版社 1981
- 注8 亀井明德『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎 1986
- 注9 注1b文献
- 注10 考古学では○○系と呼称することが多いが、概念があいまいであることが多い。中世陶器で例示すると、常滑焼と常滑焼系は常滑産と常滑模倣Ⅰa、あるいは常滑模倣Ⅰbと呼称した方がより原型との関係が明らかとなる。更に、常滑産と言っても常滑独特の技法でないものは理論上有り得るので、今後は原型という概念を使用したい。原型とは、ある地域で生産された独特の型ということである。たとえば、丹波で生産された丹波独特のものを丹波原型と呼ぶことにする。したがって、丹波で生産された常滑模倣のものは、常滑模倣型Ⅰbとなる。なお、ここで提示する原型と模倣型については、下記の文献で説明しているので参照されたい。
伊野近富「原型・模倣型による平安京以後の土器様相」(『中近世土器の基礎研究』Ⅴ日本中世土器研究会)1989.11
- 注11 第6図左、間壁忠彦「美作津山近郊出土と伝える奈良三彩蓋付壺」(『倉敷考古館研究集報』第20号)1988 同右、『世界陶磁全集11隋・唐』小学館 1976, P.70の万年壺で、通高23.8cm
- 注12 田中琢「古代窯業の展開」(『講座・日本技術の社会史 第四卷 窯業』日本評論社)1984
- 注13 西弘海「土器様式の成立とその背景」(『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集)平凡社 1982
- 注14 申敬澈「伽耶地域の陶質土器」(『陶質土器の国際交流』大谷女子大学資料館編集)1989

平成元年度発掘調査略報

3. 日光寺遺跡第2次

所在地 熊野郡久美浜町字浦明小字日光寺
 調査期間 平成元年5月9日～10月6日
 調査面積 約350m²

はじめに 日光寺遺跡は、久美浜湾に望む標高15～16mの海岸段丘上に位置する複合遺跡である。付近には長良遺跡、鳥取城跡、浦明遺跡などが段丘上に点々と分布している。調査は、京都府土木建築部の依頼を受けて、国道178号バイパスの建設に先立って昨年度から行っている。昨年度の調査では、弥生時代から鎌倉時代に至る多数の遺構・遺物を検出した。今回の調査は、昨年度の試掘調査で良好な遺物包含層および、遺構の存在が判明していたC調査区について行った本調査である。

調査概要 調査の結果、2面の遺構面を検出した。上層の第1遺構面では奈良時代後半の須恵器杯身・杯蓋を重ねて埋納した土坑のほか、注目すべき遺構としては、鎌倉時代の墓1基、平安時代末期の掘立柱建物跡1棟がある。下層の第2遺構面では、谷状地形のほか、多数のピットを検出した。

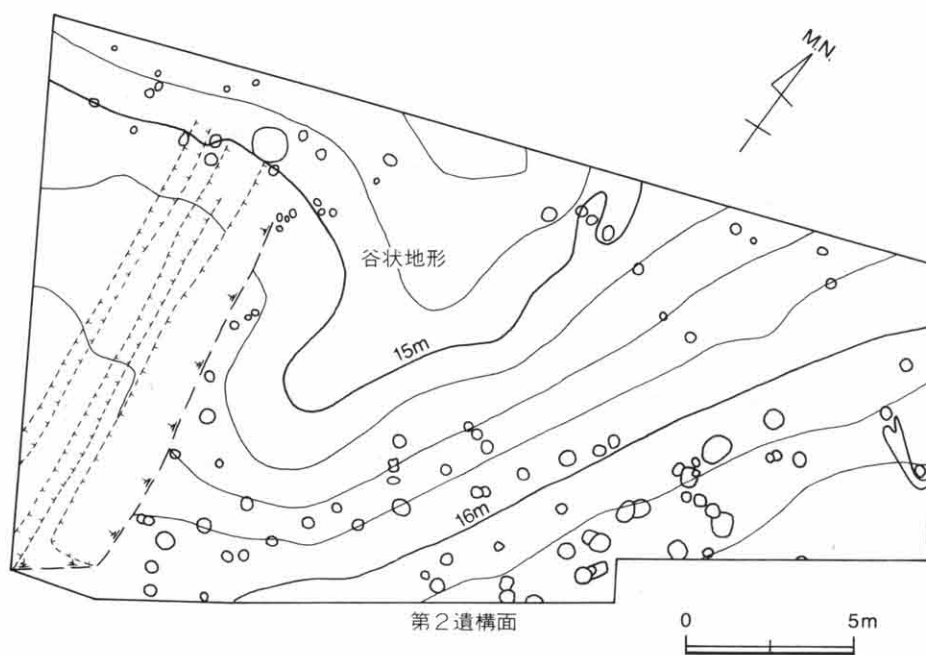
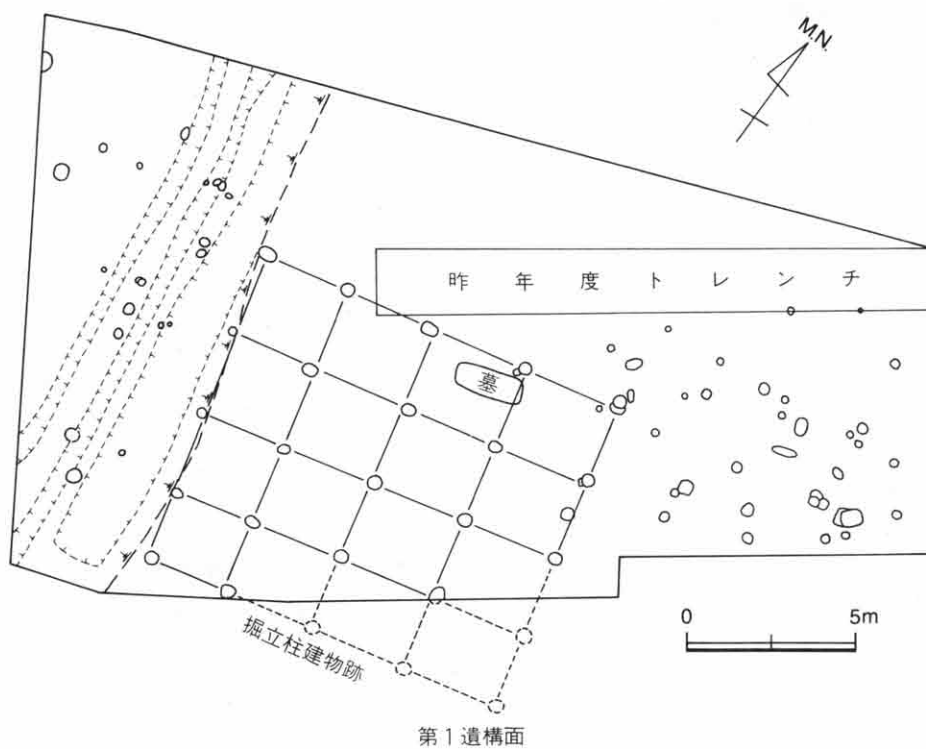
鎌倉時代の墓は、東西方向の主軸をもち、約2.1m×0.8mの隅丸長方形を呈する。平均の深さは約0.3mを測る。墓壇の東端付近には完形の青磁碗が、中央南寄りには長さ約34cmの短刀が切先を西に向けて副葬されており、東頭位で埋葬されたものと思われる。

平安時代末期の掘立柱建物跡は4間×4間の総柱建物で、東西約11m・南北約9.5mを測る。柱の掘形は直径40cm程である。柱穴のひとつから、青白磁小壺が出土した。青白磁小壺は、府北部では福知山市の大内城跡に出土例があるのみで、極めて珍しいものである。また、下層の調査で検出した谷状地形は、この建物を建てるために埋められたものと思われた。地形の改変を行って大規模な建物を建て、青白磁小壺入手できた庄官クラスの有力者の存在が想定されよう。

(森島 康雄)



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 日光寺遺跡遺構平面図

4. 上野遺跡

所在地 中郡峰山町字上常吉
 調査期間 平成元年7月5日～9月14日
 調査面積 約1,300m²

はじめに 上野遺跡は、大型石庖丁の出土地として周知の遺跡で、竹野川に流れ込む常吉川に面した標高約90mの丘陵地に所在する。今回の発掘調査は、大宮町上常吉区の府営ほ場整備事業に伴い、京都府農林水産部耕地課の依頼を受けて実施した。調査は、京都府教育委員会が昭和63年度に実施した試掘調査の結果に基づいて行った。調査を行うにあたっては、調査区を2か所設定し、当調査研究センター(A地区)と京都府教育委員会(B地区)がそれぞれ分担して発掘調査を行った。

調査概要 A地区では、竪穴式住居跡1基と掘立柱建物跡6棟以上などを検出した。

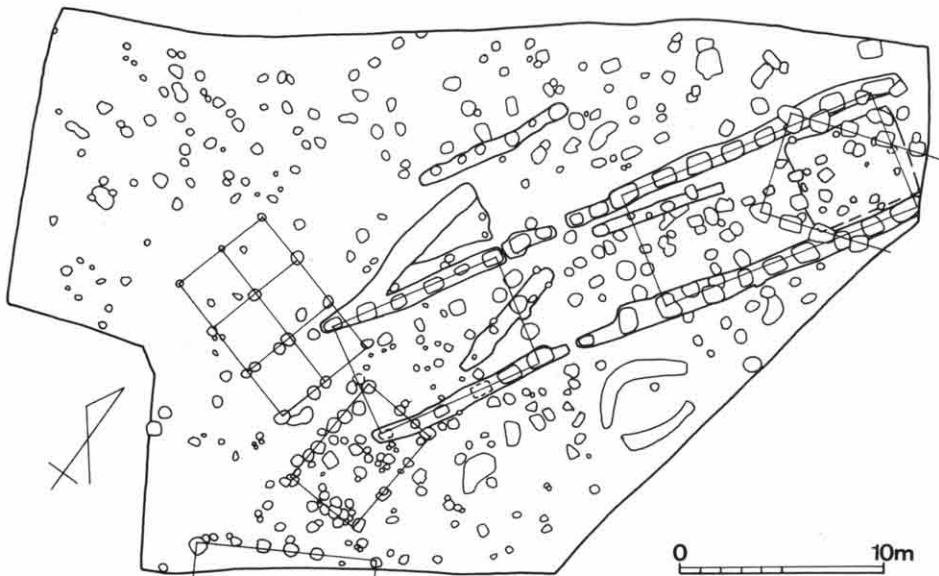
竪穴式住居跡は、両辺の周壁溝と床面の一部がかろうじて残存していた。西辺の周壁溝の長さは約5.4mを測り、住居跡内から柱穴と焼土1か所を確認した。時期については、出土遺物がなく不明であるが、B地区で検出した住居跡の時期(7世紀後半から8世紀)に近いと考えられる。

掘立柱建物跡は、現在までのところ、6棟確認している。このうち、2棟は、幅約1mの溝を掘り、その底に平面長方形の柱掘形を等間隔に配した、布掘り式の掘立柱建物跡である。このような建物跡は、京都府綾部市に所在する味方遺跡でも検出されている。それは、掘立柱建物跡の短辺を布掘りしており、長さ4.8mで3条平行して確認された。上野遺跡の布掘りは、6m間隔で2条平行しており、その長さは約30mと長く、柱掘形の位置も対応することから、方位を同じくする数棟の建物跡の長辺を布掘りしたものと考ている。布掘りは、1・2か所途切れており、中間で掘形がわずかにずれることから、2棟の掘立柱建物跡と想定した。時期は、奈良時代末から平安時代前半である。

このような遺構は、西日本では非常に珍しいものである。柵列跡や建物跡に用いられているが、



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 A地区遺構配置図

今回検出した布掘りの大規模な例としては、岡山県の足守川下流域左岸の沖積平野に所在する、津寺遺跡(中屋H2区)がある。津寺遺跡の布掘りは、南北130m・東西90mをめぐり、掘立柱建物跡を囲む形で2条確認されている。このように上野遺跡の布掘りの性格とは異なるが、検出状況は類似する。上野遺跡では、地理的条件や遺構の規模などから、掘立柱建物跡と考えているが、他の類例と比較して今後検討しなければならない。

このような建物跡以外に、長辺1m・短辺60~70cmの柱掘形からなる大型の掘立柱建物跡も検出することができた。建物跡の時期は、奈良時代後半から平安時代前半である。

B地区では、竪穴式住居跡3基と柱穴群を検出した。竪穴式住居跡は、一辺が4~5mで、周壁の残存高は5~10cmしかなく、上面は削平されていた。住居跡内床面から柱穴や焼土が確認されている。埋土内遺物からみて、7世紀後半から8世紀頃に属すると考えられる。柱穴群は、後世の開墾や耕作などによる削平が著しく、建物跡などの遺構としてのまとまりを示していない。

まとめ 今回の調査で、7世紀後半から8世紀頃の竪穴式住居跡と奈良時代後半から平安時代前半頃の掘立柱建物跡を検出した。中でも、布掘り式の掘立柱建物跡は、非常に珍しく、常吉川沿いに位置する正垣遺跡やその他の遺跡の調査結果とも比較検討していかなければならない。

(岡崎 研一)

5. 温江遺跡第2次

所在地 与謝郡加悦町字温江・加悦他
 調査期間 平成元年5月8日～7月27日
 調査面積 約850m²

はじめに 今回の発掘調査は、京都府土木建築部の依頼を受けて、一般国道176号の道路新設改良事業に伴い実施した。昨年度行った試掘調査の結果、路線内では過去のは場整備の影響で、遺構の残存状況は悪いものの、弥生時代後期を中心にして弥生時代中期から平安時代にかけての遺物が出土した。なかでも、拡張調査を行った第1トレンチでは、弥生時代後期の貯蔵穴と考えられる土坑等を検出し、弥生時代後期の集落の一角を確認した。今年度は、遺跡の立地する段丘南端部において、トレンチを設け調査を行った。

調査概要 今回検出した主な遺構としては、古墳時代後期の竪穴式住居跡・奈良時代の溝・平安時代の掘立柱建物跡等がある。

奈良時代の溝は、幅1～4m・深さ0.7～1.3mを測り、ほぼ南北方向を向く。南から北へ向かい、幅・深さともに増す。これは、等高線に沿うように段丘縁辺部を流れており、自然流路とは考えにくい。溝中からは、弥生時代～奈良時代にかけての遺物が出土している。注目されるものとしては、初期須恵器(破片資料で数点)・奈良時代の墨書土器(杯身の底部に「礼」と判読できる文字)等がある。

古墳時代後期の竪穴式住居跡は、削平が著しく残存状況は悪いが、一辺約4.5mを測り、隅丸方形の平面プランを呈する。住居跡内からは、TK209型式に併行する須恵器が出土した。

まとめ 今回の調査地では、主に古墳時代以降の遺構を検出した。この状況は、本遺跡の東に隣接する中上司遺跡と共通したものである。特に、古墳時代後期の集落の資料は、この地域でも徐々に増加しているが、その様相については今後の検討課題である。

奈良・平安期については、顕著な建物はなかったが、調査地周辺には住居跡等の遺構が広がっているものと推測される。(森 正)



調査地位置図(1/50,000)

6. 土師南遺跡第4次

所在地 福知山市字土師小字南町810

調査期間 平成元年8月21日～9月12日

調査面積 800m²

はじめに この調査は、京都府教育委員会の依頼を受けて、京都府立福知山高等学校の校舎増築工事に伴い実施した。この校内では昭和56年度から58年度にかけて、3次にわたる調査を、当調査研究センターが実施している。このうち昭和58年度に行った第3次調査では、本館部分から溝・土坑などの遺構や、12世紀後半から13世紀を中心とする遺物が出土した。

調査概要 今回の調査は、体育館の改築工事に伴うもので、調査地は、校内のほぼ中央やや南寄りに位置する。これまでの調査によって、南側部分は造成によって削平をうけているが、北側部分は盛土して造成しているため、遺構・遺物が残存していることを確認している。そのため、今回の調査地内の最も北側にあたる部分と、攪乱されている可能性の少ない木造校舎跡部分に、A・B両トレンチを設けて掘削した。

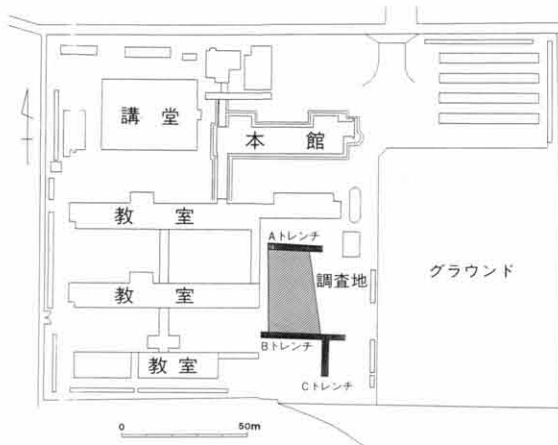
その結果、東側は段丘礫層まで削平されているが、西側ではわずかに削平されていない部分を確認した。そこで、両トレンチ間の西半部を掘り広げたが、遺構・遺物は出土しなかった。また、南側にCトレンチを設けて掘削したが自然流路跡を確認したのみで、遺物は出土しなかった。

小 結 今回の調査地は、ほぼ全面的に削平されており、顕著な遺構・遺物は残存していないものと判断する。

(引原 茂治)



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 トレンチ位置図

7. 観音寺遺跡

所在地 福知山市字観音寺
 調査期間 平成元年4月20日～9月6日
 調査面積 約4,000m²

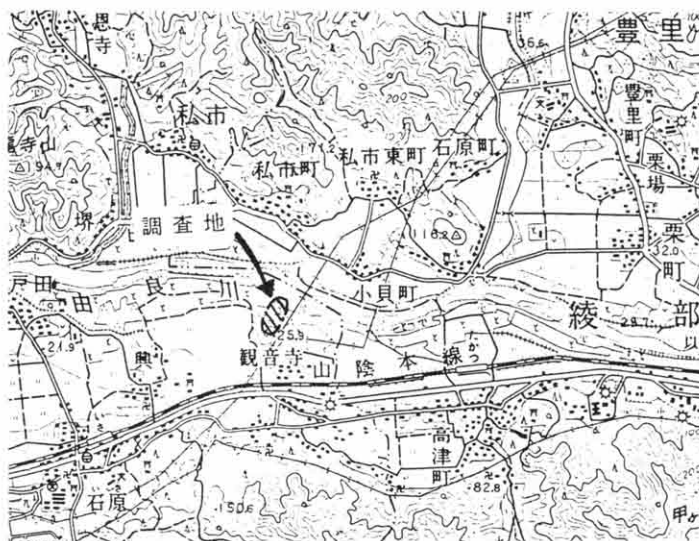
はじめに 今回の発掘調査は、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて、近畿自動車道教賀線建設に伴って実施した。

観音寺遺跡は、綾部市との市境近く、由良川左岸の自然堤防上に立地する集落跡である(第1図)。大正年間に観音寺集落北側の沖積地から弥生時代の有樋式石剣が掘り出されたり、昭和54年度の京都府教育委員会による発掘調査で弥生時代から中世にかけての考古資料がみつかったこと^(注2)で著名な遺跡である。散布する遺物から、遺跡範囲はかなり広いものと予想される。

調査概要 今回の調査は、昨年度の試掘調査結果をもとに、遺物が比較的多く出土した地点を中心に拡張した。AからEまで、5つの調査区を設けて掘削した(第2図)。

この結果、弥生時代中期の自然流路・溝・土坑、室町時代の溝・土坑・柱穴群(掘立柱建物跡?)などの遺構に伴い、多量の土器類が出土した。各調査区の掘削深度は、平均して地表下1m前後であるが、弥生時代中期の自然流路を検出したB～Dの調査区では、部分的に地表下2m以上の深さまで掘り下げた。

全調査区中、とりわけ、D地区は、室町時代初期(14世紀中頃)の柱穴群・溝を検出し、比較的安定した遺構面(上層)が捉えられた(第3図)。さらに下層では、溝状遺構・土坑などが検出された。下層のこれらの遺構については、所属時期を決定できない



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 調査区配置図(黒ぬり部分は試掘坑s:1/4,000)

る。自然流路は、B調査区の北東部で幅2.5m以上・深さ約1.5mの規模で確認した。この流路は、ある程度埋まった時点で、人為的に掘り返された形跡が窺えた。出土遺物は弥生時代中期(第Ⅳ様式)が中心で、甕・壺・高杯など一般的なものは揃っている。

まとめ 今回の調査では、弥生時代中期から室町時代に至る遺構・遺物を主に検出した。

弥生時代については、出土遺物量は多いが、遺構については溝(自然流路)・土坑以外では明確なものを確認できなかった。調査地は集落(自然堤防上)からやや外れた場所、すなわち由良川の氾濫原・後背湿地などに相当するのであろう。

室町時代初期(14世紀中頃)には、人々の居住するところとなる。平安時代末の六人部新荘や観音寺との関係を示す資料は、今回の調査では得られなかった。弥生時代から室町時代に至る複合遺跡としての性格が鮮明になった点が今回の成果と言えよう。

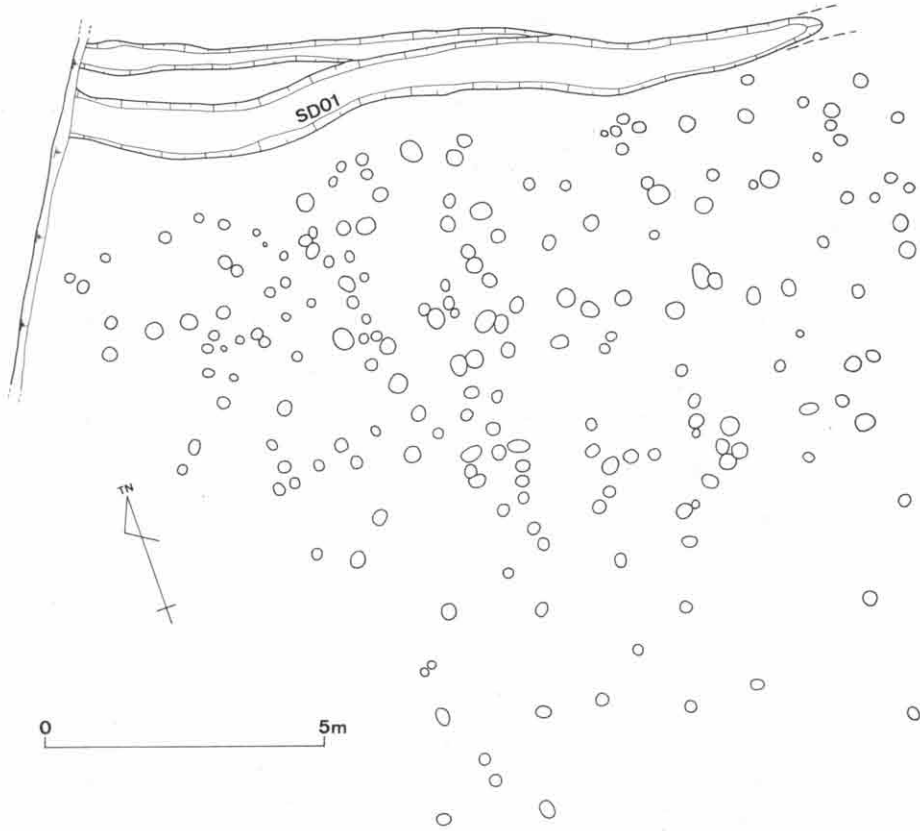
(黒坪 一樹)

が、弥生時代中期から平安時代にかけての遺物が多い。

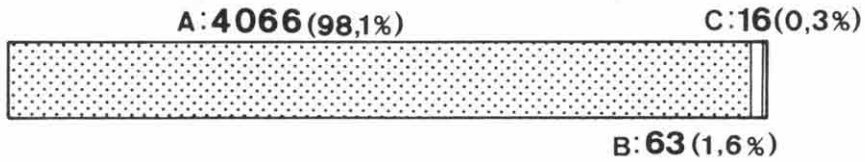
D調査区の溝(SD01)は、小規模なものであるが、中から多量の土師器皿が出土した。出土遺物全体からみると、98%以上の高い割合を占めている(第4図)。土師器皿のほかは、^(注3)瓦器碗・フイゴの羽口・陶器などの細片が少量である。何らかの祭祀を行ったものと思われる。

また、溝(SD01)南側の柱穴群の性格は不明であるが、1~2棟の簡便な掘立柱建物があったと考えている。これら柱穴群の中には、溝(SD01)と同様、土師器皿のみを十数点以上包含するもの、また管状土錘が数個まとめて出土するものなどがある。土師器皿の年代は、その形態から、溝(SD01)・柱穴内のものとともに14世紀代である。

弥生時代の遺構は、A~D調査区から検出した自然流路と土坑であ



第3図 D調査区溝(SD01)・柱穴群実測図



第4図 SD01内遺物組成グラフ(A:土師器皿 B:瓦器碗 C:陶器類他)

- 注1 梅原末治「西中筋村石剣発見ノ遺跡」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第3冊)1922
注2 堤主三郎・久保哲正「観音寺遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』京都府教育委員会)1980
注3 出土遺物数は完成品の個体数ではなく、およそ1cm大以上の破片総数で表わした。

8. 興 遺 跡

所在地 福知山市字興・字観音寺
 調査期間 平成元年4月20日～9月20日
 調査面積 1,400m²

はじめに 興遺跡は、由良川によって形成された沖積地縁辺部に位置し、自然堤防状の微高地に立地している。この遺跡は、1945年に興小字上地で行われた道路工事に際して台付無頸壺が発見され、弥生時代中期の集落跡として注目されるようになった。今回、この遺跡の隣接地に近畿自動車道敦賀線が敷設されることになり、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて、事前に発掘調査を実施した。

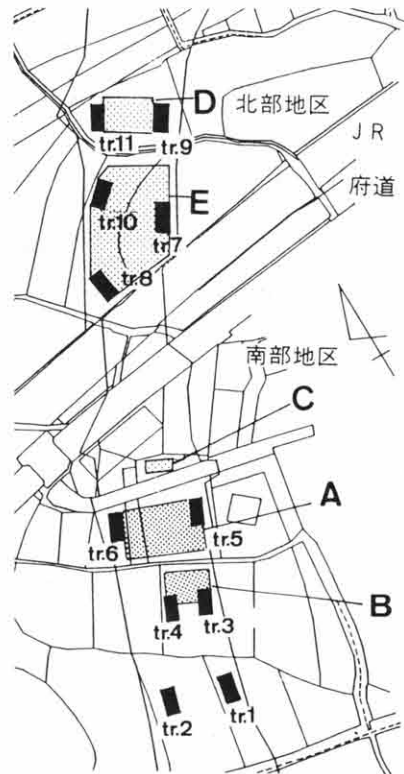
調査は、昨年度に試掘調査を行い、遺構が分布する地点を確認した。その後、南部地区を拡張して面的な調査を実施したところ、弥生時代中期に属する溝や柱穴、中世の掘立柱建物跡、土壌墓等多数の遺構・遺物を確認した。その結果、この遺跡が弥生時代中期から中世にわたる複合集落遺跡であることが判明した。

今年度は前年度の調査成果をうけて、北部地区の調査を実施した。

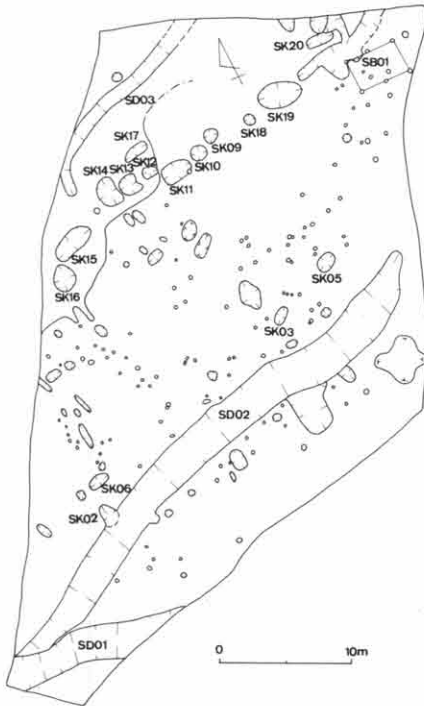
調査概要 北部地区では農道を挟んでE地区とD地区の2つの拡張区を設定した。以下、検出遺構のうち主なものについて説明する。

E地区では溝や土坑、柱穴などを検出した。

SD01・02は大溝である。SD01は、幅3m・深さ1.5mの規模をもち、14mにわたって検出している。SD02は幅3m・深さ1.4mを測り、45mにわたって検出した。この2本の溝は、西端で合流しており、合流した後南へむかって湾曲してのびている。SD02は、ゆるやかに弧を描き、調査地東端で浅くなって途切れている。溝埋土の観察からSD02が先に掘削され、これが埋った後にSD01が開掘されたことがわかっている。これらの溝には多量の土器が埋没していた。



第1図 興遺跡トレンチ配置図



第2図 E地区検出遺構分布図

溝と同じ第Ⅳ様式のものである。SK15・16・19などからは完形に近い壺や甕などが出土している。

SD03は、幅1.2m・深さ0.6mの小規模な溝である。SD02同様、末端部で浅くなって途切れていた。Ⅳ様式の壺、甕などが出土した。掘立柱建物SB01は1間×2間以上の規模をもつが、時期や性格は明らかではない。

D拡張区では、E拡張区で検出したSK15・16・19などと同様の形状、埋土をもつ土坑10基あまりと、溝を検出し、E地区の土坑の広がりを確認することができた。土坑SK09からはⅣ様式の土器とともに木製管が出土した。弥生時代の管の出土例は類例に乏しく、貴重な資料となった。

E・D地区で検出した土坑群は、集落域から一定の距離を置いて分布しており、群集する傾向を持つようである。同様の傾向は綾部市青野遺跡や舞鶴市志高遺跡などで確認されている。特に志高遺跡では方形周溝墓群に近接して集中的に検出されており、土壌墓の可能性が指摘されている。当例も同種の遺構と考えておきたい。

(田代 弘)

SD01の底部付近からは土器の破片に混在した状態で分銅形土製品が出土している。SD01・02は、途切れていることや土層に水が流れたような痕跡があまり観察できないことなどから、水路ではなく区画溝と考えている。土器はいずれも弥生時代中期(第Ⅳ様式)に属するものである。

SD02の北側は遺構がまばらで、柱穴や土坑が散在していた。SK02・03・05・06は溝と同時期のものである。SK02はSD02が埋没後に掘削されていた。

調査地区の北半では、大溝に平行するように並んで作られた土坑群を検出した。土坑SK09～SK20などがそれである。これらは円形のもの、長楕円形のもの、方形のもの、不整形のものなどさまざまであったが、列状を呈している点が興味深い。いずれも

9. 千代川遺跡第15次

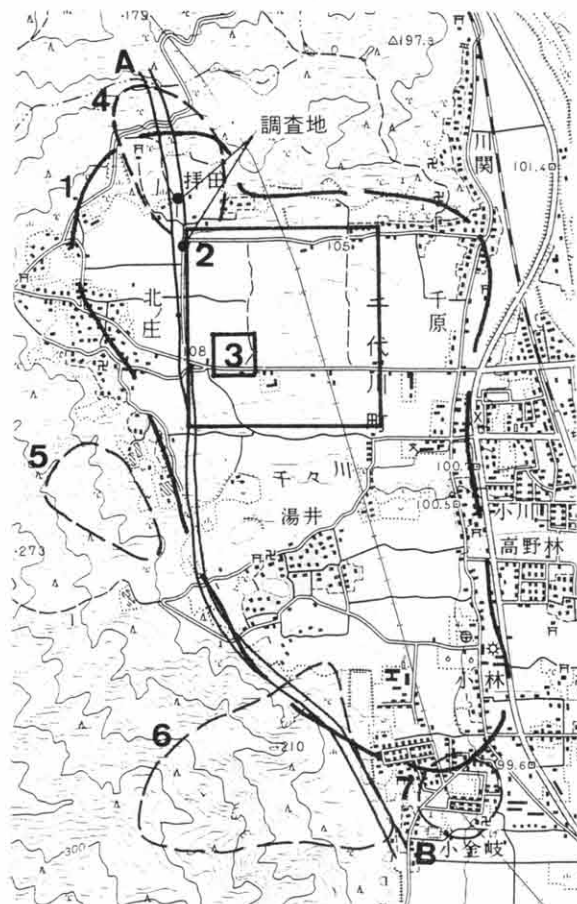
所在地 亀岡市千代川町拝田
調査期間 平成元年4月17日～9月5日
調査面積 約2,200m²

はじめに 今回の調査は、建設省近畿地方建設局が進めている「国道9号バイパス(京都縦貫自動車道)」建設に先立ち、同局の依頼により行ったものである。

千代川遺跡は、亀岡盆地を南北に貫流する大堰川の西岸にあたり、行者山の北東麓に形成された扇状地上に位置する。これまでの調査成果から、縄文時代後期から鎌倉時代にわたる長期の集落遺跡であることが判明している。特に遺跡の北半部は、丹波国府跡推定地や桑寺廃寺を含み込み、複合遺跡の様相を呈している。

バイパスは、千代川遺跡の西部を通り、丹波国府跡推定地の西辺部を南北に縦断するように計画されている。そのため、当調査研究センターでは、昭和59年度に試掘調査を行い、翌60年度から年度毎に区切って面的調査を進めてきた。本年度はその5年目に当たり、今回の調査をもって国道9号バイパスに伴う千代川遺跡の発掘調査も終了することとなった。

調査概要 昭和60年度の千代川遺跡第10次調査より、バイパス路線内に計35か所の調査区を設定した。今回の発掘調査は、No. 29・32区の2か所で行った。



第1図 調査地位置図(1/25,000)

1. 千代川遺跡
 2. 丹波国府跡推定地
 3. 桑寺廃寺
 4. 拝田古墳群
 5. 北ノ庄古墳群
 6. 小金岐古墳群
 7. 馬場ヶ崎遺跡
- A～B: バイパス路線

No. 29区 この調査区は、昨年度調査したNo. 13区の北側の部分に相当する。調査地の南辺部では、北側へむかってのびる中世素掘り溝を確認した。これは、昨年度の13区北辺で確認した素掘り溝の延長部に相当するものと思われる。溝は、幅約10~30cm・深さ約5~10cmを測る。溝内より、瓦器・土師器の小片が出土した。これらの素掘り溝は、すべ

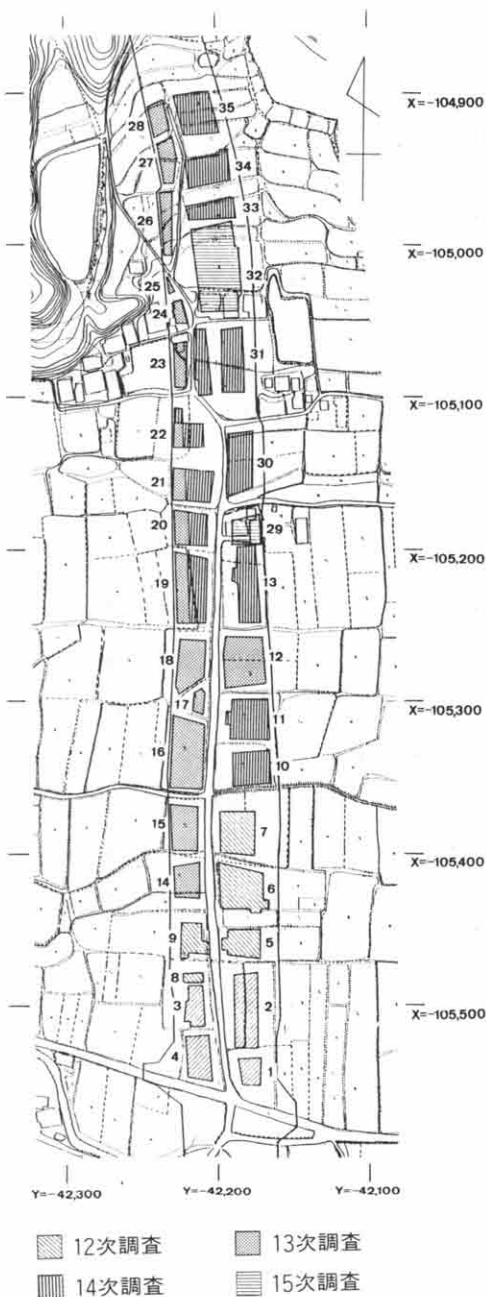
て南北方向にのび、東西方向の溝は確認されていない。奈良・平安時代の須恵器も若干ながら出土しているが、明確な遺構は認められなかった。

No. 32区 この調査区は、昨年度石帯などが出土したNo. 31区の北側に相当する。調査区東辺において、平安時代の掘立柱建物跡を3棟確認した。その中の1棟の建物は、柱穴掘形内より出土した遺物から9世紀前半に比定できる。地形は、建物部分から西へ急激に落ち込み、調査区中央は、島状地形を呈していた。なお、この島状部分には集石が認められた。

出土遺物として、石帯(巡方)2点、木簡1点をはじめ、墨書土器36点、緑釉陶器30点以上など多くの貴重な資料を確認した。

まとめ 今回の調査地は、わずか2か所で、検出遺構こそ少なかったものの、千代川国府説を考える上で貴重な資料を追加することができたといえる。石帯は昨年度分もあわせて計5点を数えるが、すべて国府推定地以北の出土である。また、墨書土器36点のうち、緑釉陶器に墨書したものが約1/5を占める。墨書土器は、昭和59年度試掘調査分も加えると100数点に及ぶが、今回調査したNo. 32区出土のものは全体の約30%を占める。上記のことから考えて、国府推定域外の拜田の谷部にも、国府に関連するような施設があった可能性が高いといえる。

(鶴島 三壽)



第2図 調査地配置図

10. 長岡宮跡第228次(7AN17C地区)

所在地 向日市寺戸町西野辺1-10・11
 調査期間 平成元年7月3日～7月27日
 調査面積 約270m²

はじめに 今回の調査は、向日町警察署跡地の一部を通る、府道柚原向日線の拡幅工事に伴うものである。調査対象地は、推定長岡宮官衙割付によれば北辺官衙地区の南部にあたり、平安宮では大蔵に相当する地点となる。地形的には向日丘陵の東端に位置し、その東側の段丘面とは約2mの比高差が認められる。現在は標高約32mの平坦地となっている。このため、後世の削平を受けたと推定されるが、削平の及んでない部分での遺構・遺物の確認を目標に発掘調査を実施した。

調査概要 調査地は、標高32m前後の平坦地であるが、西から東へとわずかに傾斜しており、西端では丘陵の削平による2～3mの段差がある。この段差のある場所が、NTT社宅に通じる進入路が予定されていることから、この地点に長さ約30mの第1トレンチを設定した。

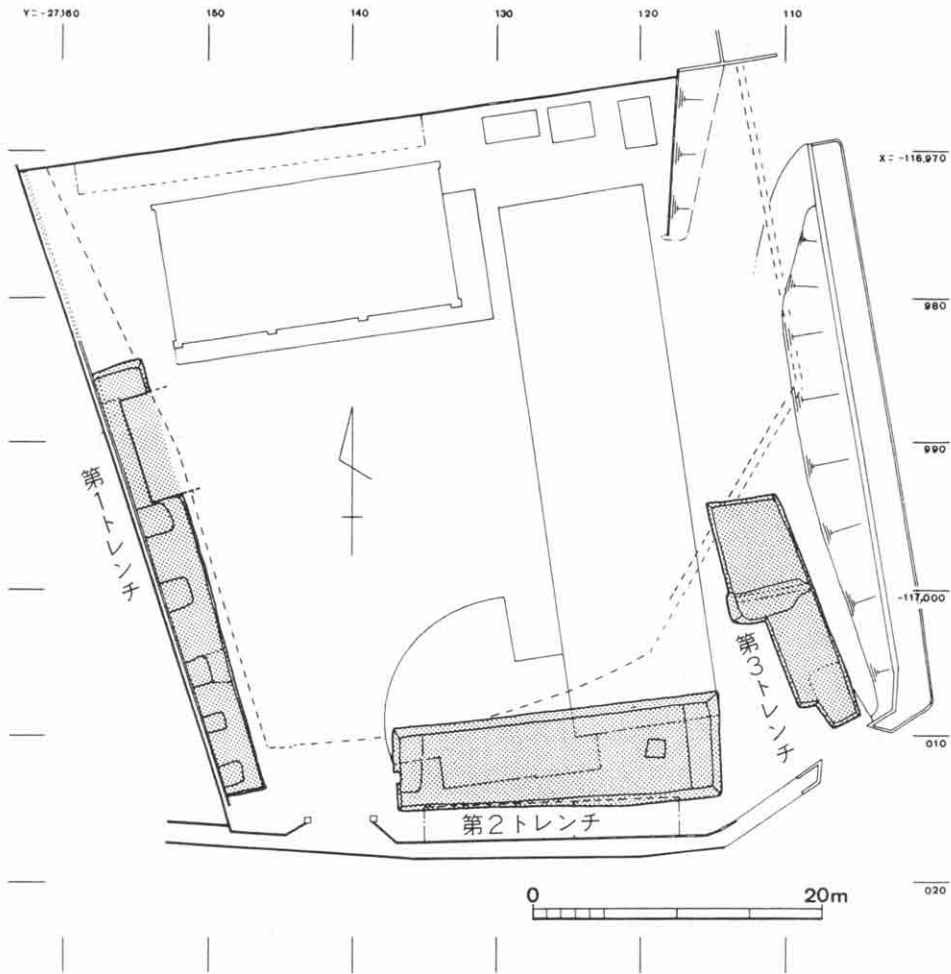


第1図 調査地位置図(1/25,000)

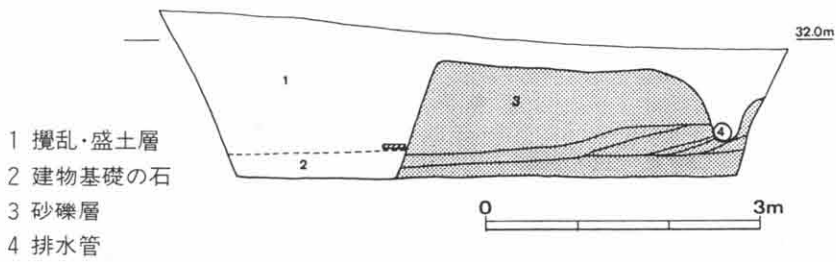
そして、柚原向日線に平行した第2トレンチ、府道椋原高槻向日線(物集女街道)に平行して削平の最も少ないとおもわれる地点に第3トレンチを設定した。

各トレンチを重機掘削の後に、人力により掘り下げ・精査を行ったが、旧向日町警察署に関する建物の基礎跡と排水施設、および攪乱が認められるほかは、表土直下が砂礫層(部分的に砂層・粘土層が帯状に含まれる)となる。砂礫層は、丘陵を形成する大阪層群と推定される。

まとめ 上記のとおり、顕著な遺構・遺物はみられなかった。後世の削平により、長岡京期の遺構等はすべて削られたことがわかった。(石尾 政信)



第2図 調査地平面図



第3図 第2トレンチ東壁断面図

11. 長岡京跡左京第222次(7ANDKD-3地区)

所在地 向日市森本町上町田
調査期間 平成元年6月12日～8月11日
調査面積 約255m²

はじめに 今回の調査は、向日町信号通信区事務所建築工事に伴い、日本国有鉄道清算事業団の依頼を受けて実施した。

調査対象地は、長岡京の条坊復原図によれば、左京一条二坊三町の推定地にあたる。過去2回の近接地の発掘調査において、東二坊第一小路東側溝及び一条第二小路北側溝が検出されている。

調査概要 今回の調査で検出できた遺構としては、近世の土坑、中世の素掘り溝、長岡京期の建物跡・柵跡・溝がある。ここでは、長岡京期について報告する。

SD22201 調査区南東部で検出した南北溝で、東二坊第一小路西側溝にあたる。幅約85cm、深さ約35cmを測る。遺物は、長岡京期のものに限られ、土師器の皿・杯・甕・手づくね土器、須恵器の壺・杯・甕、土馬、銅銭、馬の歯が出土している。土師器には墨書土器もあるが判読はできない。

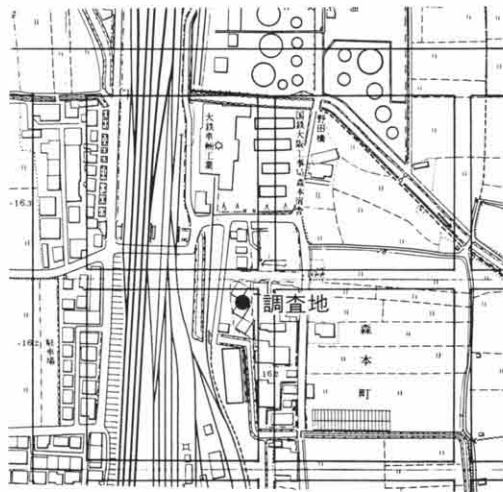
SD22202 東二坊第一小路西側溝(SD22201)に並行する溝で、道路より内側の溝と考えられる。溝は、調査区内で終わっている。出土遺物は、すべて長岡京期のものである。

SB22203 調査区北部で検出した2間×3間の南北に長い建物である。柱間は、約8尺である。東北角及び西北角の柱穴は、近世の土坑によって消滅していた。

SA22204 南北方向の柵と考えられる。柱穴から、漆皮膜、漆を入れていた須恵器の杯が出土した。

SA22205 南北方向の柵で、SA22204に並行する。

以上の遺構の埋土は、すべて暗灰色シルトである。第2図に図示した他のピットの埋土の多くは、暗黄褐色シルトであ



第1図 調査地位置図(1/50,000)

り、埋土に違いが見られる。暗黄褐色シルトを埋土とするピットは、中世の素掘り溝によって切られていることから、中世以前の所産であることがわかる。明確な遺物が共伴しない。また、調査区内では、中世より前の遺物は、長岡京期のもの以外には、若干の灰釉陶器と古墳時代後期(TK209)と考えられる須恵器杯身1点のみであることから、暗黄褐色シルトを埋土とするピットも長岡京期のものと考えた。

まとめ 長岡京期の主な調査成果としては次のとおりである。

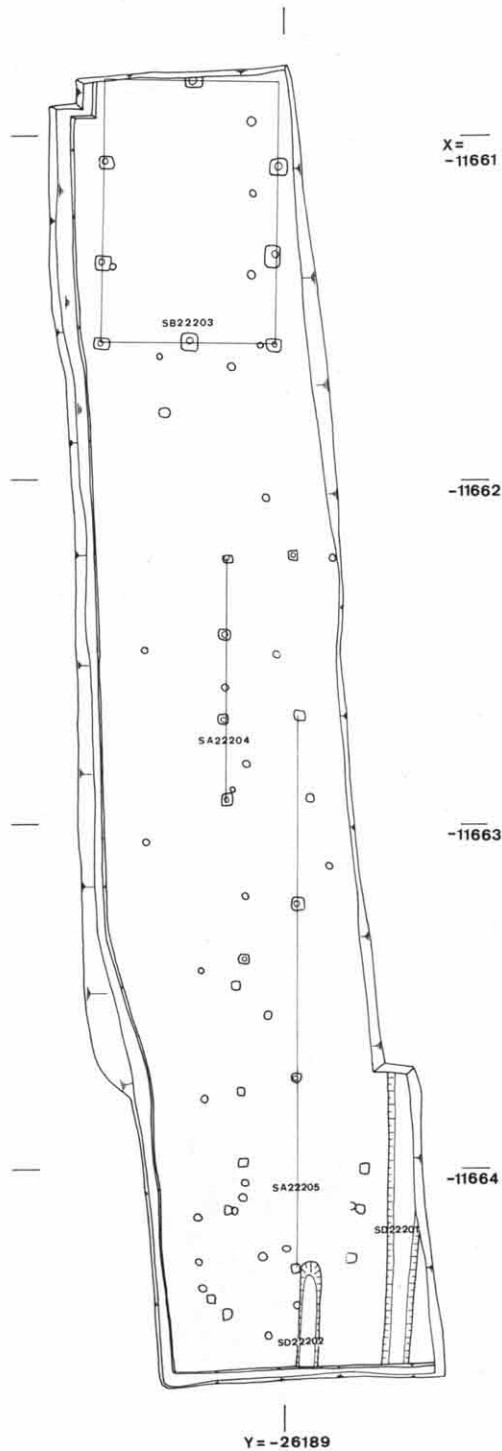
(1)調査区の北側で長岡京期の建物が検出でき、かつ、長岡京期の東西溝(一条第二小路の南側溝)が認められなかったことと、これまでの発掘調査から、推定一条第二小路の道幅が小路の幅であることが想定できた。

(2)これまでの調査で検出されている東二坊第一小路東側溝と今回検出した西側溝の溝の中心間距離は約9.7mである。

(3)漆を用いる作業が行われていた。

以上のように、条坊関係及び、人間の活動の一部が明らかになった。遺構内の土器組成などについては現在整理中である。

(中川 和哉)



第2図 調査地平面図(長岡京期)

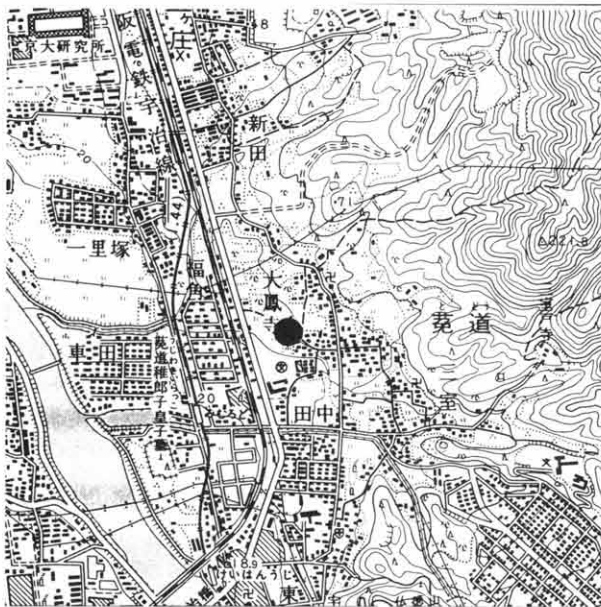
府下遺跡紹介

45. 大鳳寺跡

大鳳寺跡は、宇治市菟道西中を中心に広がる寺院跡である。この地は、『山城名勝志』に「大鳳寺は三室戸寺西北に在り、今は寺を廃して、村の名となす」とあるように、古くから寺院が存在したという伝承が残っている。江戸時代には「大鳳寺村」と呼ばれていた。明治になると、三室村と合併して菟道村と改称されたが、付近では現在でも「大鳳寺」の名で通っている。

大鳳寺は、『日本書紀』以下の正史には見えない寺院名ではあるが、「大鳳寺」の名を刻んだ文字瓦がこの付近から出土したという伝えもあり、この地に「大鳳寺」と称する寺院がかつて存在したことは確実なようである。

この寺院の創建については、縁起類の一切の伝承が残っていないため、全く検討することができない。わずかに、瓦の採集などから、7世紀後半頃に建てられたのではないかと、推定されていたにすぎなかった。その後、1971年3月にこの寺院跡の範囲確認調査が実施され、さらに1979年には宇治高等学校の建設工事に先だって発掘調査が行われ、次第に寺院としてのようすが明らかになってきた。また、1980～1986年までの5か年にわたり宇治



第1図 遺跡所在地 (1/25,000)

市教育委員会によって行われた発掘調査によってほぼ全容が明らかになった。

それによれば、最古の瓦の型式として「川原寺」式軒瓦が見つかったので、創建は、これまでの推定どおり、7世紀後半としてよいことが確認された。また、寺域は、南北1町(約112m)・東西1町の規模を持つと推定され、中軸線がやや東に傾いた形態をしている。東西を画する施設は確認されていないが、北

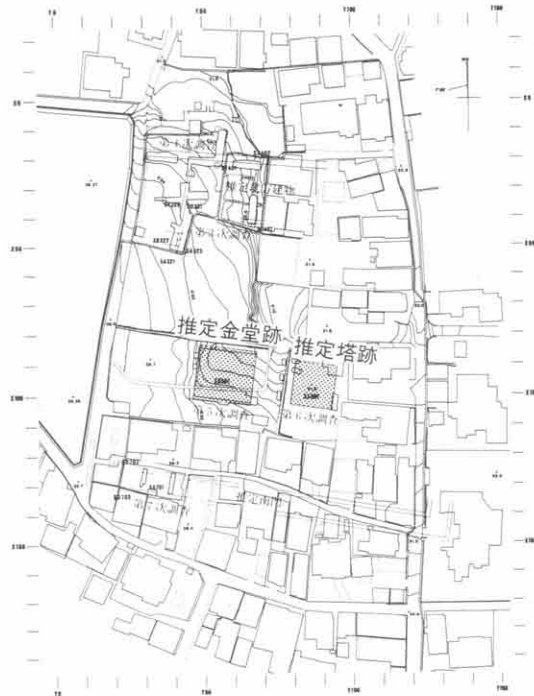
が溝、南が築地塀であることから、東西とも築地塀であったと考えられている。

検出された建物跡としては、寺域の中央部で瓦積み基壇の建物跡1棟と、その東となりで不明の建物遺構が1棟ある。このうち、瓦積み基壇の建物跡は、16.1m×19.5mを測る東西棟の構造を持っている。この建物跡の近辺からは、創建当初の瓦と推定されている「川原寺」式軒瓦が出土するので、この建物が創建時から存在したことが確実となった。このように、瓦葺きであることや東西棟で仏像を南向きに安置しやすいことからみて、金堂である可能性がもっとも高い。また、この建物跡の東側で、基壇状の高まりが確認されている。ただ、この遺構は、近世に大きく改変されたため、どのような性格の建物跡であったかははっきり知りえない状況であったという。しかし、位置的にみて、現時点では塔跡とするのがもっともふさわしいと推定されている。

このように、伽藍についてははっきりしない点が多いが、金堂と塔が東西に存在するとすれば、法起寺式伽藍配置をとることになる。このような伽藍配置をとり、中央の大寺院と同じ「川原寺」式の軒瓦を葺くことのできた大鳳寺は、木津川右岸に位置し、交通の便も非常によいこともあって、7世紀後半から8世紀にかけてはかなり栄えた寺院であったことは認めてもよからう。

大鳳寺の改修については、8世紀と9世紀に行われたことが出土した瓦の編年から指摘されている。このうち、8世紀の改修は、天平17(745)年の平城京遷都以降に行われたらしく、改修は創建から70年後となる。9世紀の改修は、平安宮に用いられた瓦を使っており、この寺院が中央と何らかの結びつきがあったことを窺わせる。このときも、8世紀の改修から約70年が経過しているので、金堂の建物としての耐用がおおよそ70年前後であったことを示していて興味深い。

このように、大鳳寺は中央との結びつきもあってか、9世紀頃までは確実に瓦葺きの金堂も改修がなされ



第2図 大鳳寺跡伽藍推定図
(『大鳳寺跡発掘調査報告』より転載)

たりしていた。しかし、この後は全く改修工事は行われず、発掘調査の成果に基づく限り、13世紀後半から14世紀前半には途絶したようにみえる。実際、「仁平2(1152)年東寺御影供菓子支配状」(『東寺文書』)には、大鳳寺が「粽十合」を東寺に供したことが見え、このころまでは確実に存在したことがわかる。また、『仁和寺諸院家記』には、仁和寺の支院の一つの「尊勝院」を統括した「覺杲僧正」の名があがっている。その文注には、「菩提院、自性院、大鳳寺、同院管領」と見え、覺杲は大鳳寺を統括する立場にあった。このことからすると、大鳳寺は13世紀以降になると、東寺や仁和寺などの真言宗系の寺院と関係が深くなったようである。ただ、この時点まで、金堂が存在したかどうかは疑問であろう。瓦の編年から考えれば、鎌倉時代のもは出土しておらず、このころまで建物が存在したとは考えにくい。したがって、この近辺に簡単な草堂のような建物で法統を伝えていたのかもしれない。

しかし、この後、大鳳寺は史上には全く姿をとどめなくなってしまった。発掘調査の成果により、途絶するのが14世紀前半までとすれば、南北町時代の混乱期に寺院としての生命を絶たれたと推定しておくのがもっともふさわしいであろう。(土橋 誠)

〈参考文献〉

- 柴田 實「宇治古代登窯遺址」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十四冊 京都府)1933・3
『宇治市史』1—古代の歴史と景観— 宇治市 1973・1
『大鳳寺跡第3次発掘調査概報』(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第2集 宇治市教育委員会)1983・3
『大鳳寺跡発掘調査報告』(宇治市文化財調査報告第1冊 宇治市教育委員会)1987・3

長岡京跡調査だより・31

平成元年8月23日・9月27日・10月25日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮域4件、左京域13件、右京域8件の計25件であった。これら25件の調査地は、位置図・一覧表のとおりである。このうち、主なものいくつかについて、調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1989年10月末現在)

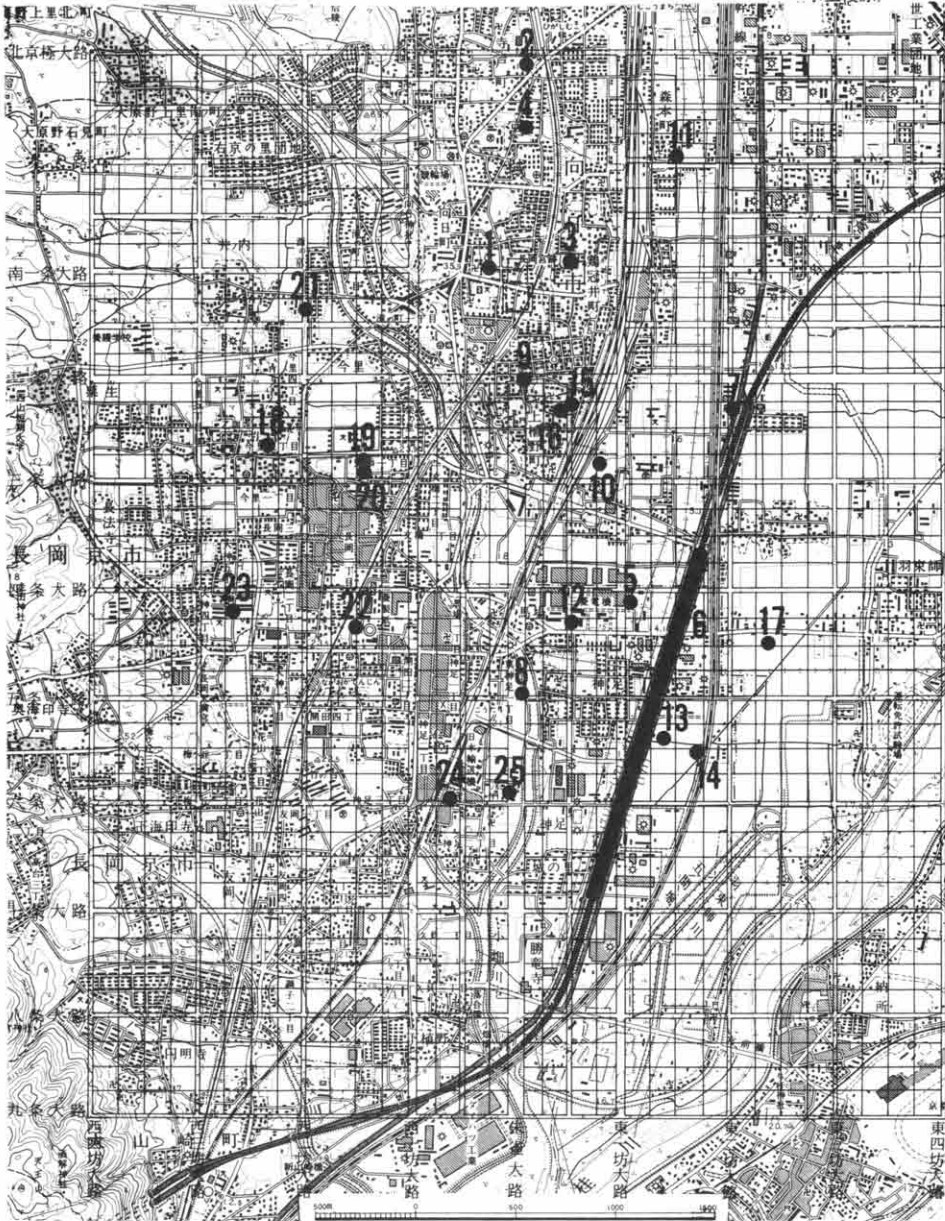
番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内230次	7AN14S	向日市鶏冠井町大極殿66-1	(財)向日市埋文	8/1～
2	宮内231次	7AN6M	向日市寺戸町初田25	(財)向日市埋文	8/7～11/15
3	宮内232次	7AN9T	向日市鶏冠井町御屋敷27-1	(財)向日市埋文	9/6～10/4
4	宮内233次	7AN11O	向日市寺戸町殿長22, 22-5	(財)向日市埋文	10/4～11/3
5	左京215次	7ANMLKC-2	長岡京市馬場北石ヶ町1-1	(財)長岡京市埋文	4/1～
6	左京216次	7ANMTD-2 他	長岡京市勝竜寺他	(財)京都府埋文	4/4～
7	左京221次	7ANFSK-2	向日市上植野町尻引1-3	(財)向日市埋文	6/5～8/10
8	左京223次	7ANMSL-3	長岡京市東神足一丁目4	(財)長岡京市埋文	6/21～
9	左京225次	7ANFMM	向日市上植野町円山15	(財)向日市埋文	7/20～8/11
10	左京226次	7ANFKS	向日市上植野町車返8-10他	(財)京都府埋文	7/28
11	左京227次	7ANDSB-2	向日市森本町四ノ坪27-12, 28-6	(財)向日市埋文	8/24～9/1
12	左京228次	7ANLTD-2	長岡京市馬場井料田10	(財)長岡京市埋文	8/28～11/30
13	左京229次	7ANMTD-3	長岡京市東神足寺田1	(財)長岡京市埋文	9/4～
14	左京230次	7ANMJN	長岡京市東神足拾貳19-1	(財)長岡京市埋文	9/18～
15	左京231次	7ANFKZ	向日市上植野町北小路28-3, 58-2	(財)向日市埋文	9/13～
16	左京232次	7ANFKZ-2	向日市上植野町北小路26-1	(財)向日市埋文	9/25～10/25
17	左京233次	7ANXOK-2	京都市伏見区羽東師古川町	(財)京都市埋文	10/2～
18	右京330次	7ANIHR-4	長岡京市今里三丁目114-1・2	長岡京市教委	6/12～8/11
19	右京333次	7ANINE-6	長岡京市野添二丁目52-1他	(財)長岡京市埋文	7/18～9/11
20	右京334次	7ANINE-7	長岡京市野添二丁目50-1他	(財)長岡京市埋文	7/20～8/26
21	右京335次	7ANGSN 7ANIFC	長岡京市井ノ内下印田・今里 更ノ町	(財)京都府埋文	8/4～
22	右京336次	7ANKKN	長岡京市開田一丁目149-4他	(財)長岡京市埋文	9/20～10/20
23	右京337次	7ANIUS-3	長岡京市天神四丁目5	(財)長岡京市埋文	10/4～
24	右京338次	7ANMNM	長岡京市東神足二丁目331他	(財)長岡京市埋文	10/16～
25	右京339次	7ANMKI-2	長岡京市東神足二丁目15-2	(財)長岡京市埋文	10/24～

市内第231次(2)

(財)向日市埋蔵文化財センター

北辺官衙および殿長遺跡の調査である。長岡京期と中近世の遺構・遺物が検出されたが、長岡京期の遺構が特に注目される。

長岡京期の遺構は、礎石建物2棟・溝4条がある。北側の礎石



▽番号は一覧表・本文()内と対応

調査地位置図

建物は、第161次調査発見の建物の東側延長部にあたり、桁行5間以上、梁行3間の東西棟建物である。南側の建物は、桁行7間の南北棟建物である。2棟は柱筋を揃え、計画的に配置された建物群の一面とみられる。平安宮古図では、大蔵の位置にあたる。この建物群は、出土した瓦から、長岡京期の後半に造営されたものと判明した。

左京第215次(5)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

左京五条二坊一町および馬場遺跡の調査である。弥生・古墳時代、長岡京期、中世・近代の遺構・遺物が検出された。

長岡京期の遺構は、掘立柱建物1棟・土坑・溝がある。掘立柱建物は、桁行4間×梁行2間、間仕切りのある南北棟建物である。町の東北隅の柵が検出された左京第125次調査地の隣接地にあたり、一町を細分した小規模宅地の一例とみられる。

左京第226次(10)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

左京三条一坊十二町・十三町、東一坊第二小路の調査である。東一坊第二小路両側溝および十三町の宅地の一面のようすが判明した。

小路の路幅は約9m、東側溝の東側約3mにさらに1条の南北溝があり、そこには轍の跡がある。小路に接した町の外周をめぐる町内道路とみるべきか。十三町の宅地は、路沿いに掘立柱建物が2棟あり、その東側は砂礫層の堆積する流路である。西側の建物は、身舎が2間四方、東を除く三面に廂をもつ。東側の建物は、桁行2間以上、梁行1間の南北棟建物であるが、梁行の柱間が5mに近く特異である。

右京第333次(19)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

右京三条二坊五町および今里北ノ町遺跡の調査である。長岡京期と中世の遺構・遺物が検出された。

長岡京期の遺構は、三条第二小路南側溝・掘立柱建物などがある。掘立柱建物は、南側溝南側約13mのところ、小規模なものが1棟のみある。

(平良 泰久)

センターの動向 (元・8~10)

1. できごと

8. 3 奥大石古墳群(綾部市)発掘調査現地説明会実施

長岡京跡右京第335次(長岡京市)発掘調査開始

- 4 奥大石古墳群発掘調査終了(5.9~)

- 5 瀬後谷遺跡(木津町)発掘調査開始

- 7 アバタ窯跡群(大宮町)発掘調査開始

- 8 古殿遺跡(峰山町)発掘調査開始
河原純之文化庁主任文化財調査官,
上人ヶ平遺跡(木津町)視察

- 17 下後古墳群・太田古墳群(弥栄町)発掘調査開始

- 18 山形古墓(久美浜町)発掘調査終了(7.17~)

長岡京跡左京第216次(長岡京市)発掘調査関係者説明会実施

- 19 「第8回小さな展覧会」閉会
第52回研修会開催—別掲—

- 21 土師南遺跡(福知山市)試掘調査開始

- 22 関係役員協議会開催—於・当調査研究センター—福山敏男理事長, 荒木昭太郎常務理事, 川上 貢・藤井学・都出比呂志・足利健亮・藤田价浩の各理事出席

- 23 長岡京連絡協議会開催

- 24・25 都出比呂志理事, 遠所遺跡群(弥栄町)等視察

- 25 塩谷古墳群(丹波町)発掘調査現地説明会実施

- 29 長良遺跡(久美浜町)試掘調査終了(7.6~)

千代川遺跡(亀岡市, 9号B.P)発掘調査関係者説明会実施。発掘調査終了(4.19~)

堤圭三郎理事(京都府教育庁指導部文化財保護課長), 上人ヶ平遺跡視察
全国埋蔵文化財法人連絡協議会「日本列島発掘展」実行委員会(北九州市)出席(杉原調査第2課長)

9. 1 都出比呂志理事, 長岡京跡(向日市)等視察

- 3 「第8回小さな展覧会」閉会

- 5 宮津城跡(宮津市)発掘調査開始
興遺跡(福知山市)発掘調査現地説明会実施。発掘調査終了(4.20~)

観音寺遺跡(福知山市)発掘調査関係者説明会実施。発掘調査終了(4.20~)

- 6 上野遺跡(大宮町)関係者説明会実施

- 7 塩谷古墳群発掘調査終了(5.22~)

7. 8 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(松山市)出席(奥村企画係長・杉江主事・黒坪調査員)

- 8 木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査関係者説明会実施

- 12 土師南遺跡試掘調査終了

- 木津川河床遺跡発掘調査終了
- 14 上野遺跡発掘調査終了
- 27 長岡京連絡協議会開催
- 30 第8回講演会開催—別掲—
- 10.4 コクバラノ遺跡(久美浜町)発掘調査開始
- 10.5 樋口隆康副理事長, 上人ヶ平遺跡視察
- 6 日光寺遺跡(久美浜町)発掘調査終了(5.9~)
- 7 上人ヶ平遺跡発掘調査現地説明会実施
- 12 古殿遺跡発掘調査終了
- 13 下後古墳群・太田古墳群発掘調査現地説明会実施
- 17 里遺跡(綾部市)発掘調査開始
- 18 高田山古墳群(福知山市)発掘調査開始
- 20 宮津城跡発掘調査現地説明会実施
長岡京跡左京第226次(向日市)発掘調査関係者説明会実施
下後古墳群・太田古墳群発掘調査終了

- 21 宮津城跡発掘調査終了
- 22 第53回研修会開催—別掲—
- 25 長岡京連絡協議会開催
- 26 山崎信二文化庁文化財調査官, 上人ヶ平遺跡視察

2. 普及啓発事業

- 8.19~9.3 「第8回小さな展覧会」開催
- 19 第52回研修会開催—京都府乙訓総合庁舎：昭和63年度の調査成果から—細川康晴「桑飼上遺跡の掘立柱建物群」, 近沢豊明「青野西遺跡の発掘調査」, 石井清司「上人ヶ平遺跡の埴輪窯と古墳」
- 9.30 第8回講演会開催—京都会館：東アジアの中の藤ノ木古墳—奥村清一郎「京都府の古墳調査の現状と課題」, 石野博信「東アジアの中の藤ノ木古墳」
- 10.22 第53回研修会開催—バスによる現地研修：藤ノ木古墳と奈良桜井の遺跡をたずねて—現地講師：伊藤勇輔

府下報告書等刊行状況一覧（'88.12～'89.10）

発掘調査報告書関係

- 『埋蔵文化財発掘調査概報(1989)』京都府教育委員会 1989.3
『重要文化財角屋(主屋奥棟)修理工事報告書』同上 1989.3
『重要文化財萬福寺齋堂修理工事報告書』同上 1989.3
『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第12集 宇治市教育委員会 1988.12
『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第13集 同上 1989.3
『城陽市埋蔵文化財調査報告』第19集 城陽市教育委員会 1989.3
『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第10集 田辺町教育委員会 1989.3
『山城町埋蔵文化財調査報告書』第6集 山城町教育委員会 1989.3
『木津町埋蔵文化財調査報告書』第7集 木津町教育委員会 1989.3
『亀岡市文化財調査報告書』第21集 亀岡市教育委員会 1989.3
『亀岡市文化財調査報告書』第22集 同上 1989.3
『綾部市文化財調査報告』第16集 綾部市教育委員会 1989.3
『福知山市文化財調査報告書』第14集 福知山市教育委員会 1989.3
『福知山市文化財調査報告書』第15集 同上 1989.3
『宮津市文化財調査報告』第17集 宮津市教育委員会 1989.3
『国指定史跡蛭子山古墳Ⅱ発掘調査概要』加悦町教育委員会 1989.3
『野田川町文化財調査報告』第5集 野田川町教育委員会 1989.3
『丹後町文化財発掘調査報告』第4集 丹後町教育委員会 1989.3
『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1989.3
『鳥羽離宮跡発掘調査概報 昭和63年度』同上 1989.3
『平安京跡発掘調査概報 昭和63年度』同上 1989.3
『長岡京跡・大蔵遺跡発掘調査概報 昭和63年度』同上 1989.3
『向日市埋蔵文化財調査報告書』第25集 (財)向日市埋蔵文化財センター 1989.3

当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

現地説明会

- 「千代川遺跡第14次」(京埋セ現地説明会資料 No.89-01) 1989.1.28
「長岡京跡右京第310次」(同 No.89-02) 1989.2.10

- 「上人ヶ平遺跡・上人ヶ平1号埴輪窯・幣羅坂古墳」(同 No.89-03) 1989.3.4
「小田垣内遺跡」(同 No.89-04) 1989.3.11
「スクモ古墳群」(同 No.89-05) 1989.6.9
「温江遺跡」(同 No.89-06) 1989.7.21
「遠所古墳群」(同 No.89-07) 1989.7.29
「奥大石古墳群」(同 No.89-08) 1989.8.3
「塩谷古墳群」(同 No.89-09) 1989.8.25
「興遺跡」(同 No.89-10) 1989.9.5
「上人ヶ平遺跡」(同 No.89-11) 1989.10.7
「太田・下後古墳群」(同 No.89-12) 1989.10.13
「宮津城跡第6次」(同 No.89-13) 1989.10.20

中間報告

- 「三宅遺跡」(京埋セ中間報告資料 No.89-01) 1989.1.25
「温江遺跡」(同 No.89-02) 1989.2.3
「木津川河床遺跡」(同 No.89-03) 1989.2.21
「興遺跡」(同 No.89-04) 1989.3.9
「桑飼上遺跡」(同 No.89-05) 1989.3.8
「長岡京跡右京第310次」(同 No.89-6) 1989.3.7
「長岡京跡左京第200次」(同 No.89-7) 1989.3.10
「長岡京跡右京第310次」(同 No.89-8) 1989.3.23
「日光寺遺跡」(同 No.89-9) 1989.7.7
「川向1号墳」(同 No.89-10) 1989.7.7
「長岡京跡左京第222次」(同 No.89-11) 1989.7.14
「長岡京跡左京第216次」(同 No.89-12) 1989.8.18
「千代川遺跡第15次」(同 No.89-13) 1989.8.29
「観音寺遺跡」(同 No.89-14) 1989.9.5
「上野遺跡」(同 No.89-15) 1989.9.6
「木津川河床遺跡」(同 No.89-16) 1989.9.8
「長岡京跡左京第226次」(同 No.89-17) 1989.10.20

府下現地説明会資料

- 「上野遺跡」京都府教育委員会 1988.12.2
「昭和63年度恭仁宮跡」同上 1989.2.19
「池田古墳群・アバタ遺跡及び阿婆田窯跡」同上 1989.9.13
「長岡京左京一条三坊六・十一町跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988.12.11
「長岡京跡左京二条二坊六町(太政官厨家跡)」(財)向日市埋蔵文化財センター 1989.2.25
「長岡宮跡第231次」同上 1989.10.7
「勝龍寺城跡」(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1989.2.26
「長岡京跡左京第204次調査」同上 1989.3.18
「大谷4号墳」網野町教育委員会 1989.8.19
「オテジ谷古墳」弥栄町教育委員会 1989.9.7
「史跡作山古墳」加悦町教育委員会 1989.6.3
「山城国府跡第20次」大山崎町教育委員会 1989.10.10
「二子塚古墳(五ヶ庄大林・西方寺境内)」宇治市教育委員会 1989.1.28
「ヒル塚古墳」八幡市教育委員会 1989.6.3
「史跡高麗寺跡」山城町教育委員会 1988.12.11
「平安京左京五条二坊十六町(藤原資長邸)」京都府京都文化博物館 1989.7.9
「京都大学医学部附属病院構内の遺跡—AH19区—」京都大学構内遺跡調査会 1988.12.16
「有熊遺跡」立命館大学有熊遺跡発掘調査団 1989.8.26
「伏見奉行所跡」伏見城研究会 1989.8.13

その他の雑誌・報告・論文等

- 『京都府埋蔵文化財情報』第31号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989.3
『京都府埋蔵文化財情報』第32号 同上 1989.6
『京都府埋蔵文化財情報』第33号 同上 1989.9
『京都府遺跡調査概報』第32冊 同上 1989.3
『京都府遺跡調査概報』第33冊 同上 1989.3
『京都府遺跡調査概報』第34冊 同上 1989.3
『京都府遺跡調査報告書』第11冊 同上 1989.3
『京都府遺跡調査報告書』第12冊 同上 1989.3
『考古展 第8回小さな展覧会』同上 1989.8
『京都府指定・登録文化財等目録』京都府教育委員会 1988.12

- 『京都府遺跡地図第4分冊(第2版)』同上 1989.3
- 『京都の文化財』第7集 同上 1989.3
- 『京都市の文化財』京都市文化観光局 1989.2
- 『京都市文化財だより』第11～12号 同上 1989.6～10
- 『宮津市の指定文化財』第4集 宮津市教育委員会 1989.3
- 『福知山城絵図』福知山市教育委員会 1989.10
- 『大山崎町遺跡地図』大山崎町教育委員会 1989.3
- 『市民考古学講座』宇治市教育委員会 1988.12
- 『史跡隼上り窯跡』同上 1989.3
- 『久御山町史』第二巻 久御山町教育委員会 1989.10
- 『加茂町史編さんだより紫陽花』第4～6号 加茂町 1988.12～1989.7
- 『加茂町史編さん資料調査報告資料研究』同上 1989.3
- 『丹後郷土資料館だより』第17号 京都府立丹後郷土資料館 1989.3
- 『丹後郷土資料館友の会ニュース』No.32 同上 1989.7
- 『弥栄=ゴレ古墳とその周辺 特別陳列図録24』同上 1989.4
- 『修験僧智海とその時代 特別陳列図録25』同上 1989.7
- 『特別展図録20 丹後縮緬』同上 1989.10
- 『山城郷土資料館だより』第11号 京都府立山城郷土資料館 1989.10
- 『企画展資料10 発掘成果速報一昭和63年度の調査から一』同上 1989.9
- 『総合資料館だより』No.78～81 京都府立総合資料館 1989.1～10
- 『京都府資料目録追録』No.5 同上 1989.3
- 『資料館紀要』第17号 同上 1989.3
- 『第6回東寺百合文書 応仁の乱』同上 1989.7
- 『海を渡ってきた人と文化—古代日本と東アジア—』京都府京都文化博物館 1989.9
- 『昭和62年度 京都国立博物館年報』京都国立博物館 1989.3
- 『京都市歴史資料館紀要』第5・6号 京都市歴史資料館 1989.3
- 『向日市文化資料館報』第4号 向日市文化資料館 1988.12
- 『開館5周年記念特別展示図録 乙訓の古墳文化』同上 1989.10
- 『昭和62年度 宇治市歴史資料館年報』宇治市歴史資料館 1989.2
- 『企画展 上林清泉』同上 1989.6
- 『宇治の古絵図—ふるさとの風景—』同上 1989.10

- 『第7回企画展示図録 米・豊かな実りを求めて—大むかしの農具—』亀岡市文化資料館
1989.4
- 『第8回企画展示図録 宝林寺—信仰のこころとかたち—』同上 1989.7
- 『第5回特別展図録 亀岡鉄道物語～汽笛がひびいて90年～』同上 1989.10
- 『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡—京都大学文学部博物館図録—』京都大学文学部考古学
研究室 1989.3
- 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』京都大学埋蔵文化財研究センター 1989.3
- 『京都橘女子大学研究紀要』第15号 京都橘女子大学 1988.12
- 『福知山考古資料室収蔵品目録 考古資料編』京都府立福知山高等学校 1989.3
- 『文化財報』No.64～66 (財)京都府文化財保護基金 1989.2～8
- 『改訂増補 文化財用語辞典』同上 1989.3
- 『会報』第66号 (財)京都市古文化保存協会 1989.1
- 『古代文化』第360～369号 (財)古代学協会 1989.1～10
- 『土車』第49～51号 同上 1989.1～7
- 『京都考古』第51～52号 京都考古刊行会 1989.7～9
- 『志くれてい』第27～30号 (財)冷泉家時雨亭文庫 1988.12～1989.9
- 『綾部藩・山家藩社寺要記』綾部史談会 1989.3
- 『乙訓文化』第49号 乙訓の文化遺産を守る会 1989.6
- 『波布理曾能』第6号 精華町の自然と歴史を学ぶ会 1989.3
- 『謎の鏡—卑弥呼の鏡と景初四年銘鏡—』(株)同朋舎出版 1989.3

受贈図書一覧 (元. 8～元. 10)

- | | |
|--------------------|--|
| (財)北海道埋蔵文化財センター | (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第54～60集, 調査年報 1 昭和63年度 |
| 苫小牧市埋蔵文化財センター | 弁天貝塚 III, とまこまい埋文だより No.17 |
| 釧路市埋蔵文化財調査センター | 釧路市材木町 5 遺跡調査報告書 |
| 岩手県立埋蔵文化財センター | わらびて No.45 |
| (財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 | 安子島地区土地改良関連発掘調査報告書 1, 中山地区土地改良共同施行事業関連発掘調査報告書 3, 郡山東部 9 |
| (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 埋文群馬 No.6, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第88・90・92・94集 |
| (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 | まがたま通信 創刊号・第2号, 研究紀要 第5～6号, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第73～83集, 年報 9 |
| (財)山武郡市文化財センター | 宮台遺跡, 岩崎横穴群, 本宿横穴群 |
| 富山県埋蔵文化財センター | 埋文とやま 第28号 |
| 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター | 福井県埋蔵文化財調査報告 第14集 |
| 山梨県埋蔵文化財センター | 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第44・47・49集 |
| 長野市埋蔵文化財センター | 長野市の埋蔵文化財 第32～34集 |
| 佐久埋蔵文化財調査センター | 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 第14～20集 |
| (財)愛知県埋蔵文化財センター | 埋蔵文化財愛知 No.18 |
| (財)滋賀県文化財保護協会 | 文化財教室シリーズ 105, 昭和63年度調査 埋蔵文化財展, 矢倉口遺跡発掘調査報告書, 宇曾川災害復旧助成事業に伴う妙楽寺遺跡 III |
| 滋賀県埋蔵文化財センター | 滋賀埋文ニュース 第112～114号 |
| 守山市立埋蔵文化財センター | 守山市文化財調査報告書 第29～31・33～34冊 |
| (財)大阪文化財センター | 大阪の埴輪窯 |
| (財)大阪市文化財協会 | 葦火 21～22号 |
| (財)東大阪市文化財協会 | 若江遺跡第29次発掘調査報告, 西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡 |
| (財)八尾市文化財調査研究会 | 八尾南遺跡第2次地点の旧石器, (財)八尾市文化財調査研究会報告 18・21 |
| 奈良国立文化財研究所 | 昭和63年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報, 奈良国立文化財研究所史料 第31冊, 飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報 8～9, 平城宮発掘調査出土木簡概報 19～20 |
| 奈良市埋蔵文化財調査センター | 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和63年度, 平城京東市跡推定地の調査Ⅶ第9次発掘調査概報 |

岡山県古代吉備文化財センター	所報吉備 第6~7号, 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 74
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒 No. 192~195, 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1987
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3・6冊
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	埋蔵文化財調査報告書 第31~33集
(財)北九州市教育文化事業団	埋蔵文化財調査室年報 5 昭和62年度, 研究紀要 第3号, 北九州市埋蔵文化財調査報告書 第74・76~78・80~87集
小郡市埋蔵文化財調査センター	小郡市文化財調査報告書 第48・51~58集
平賀町教育委員会	大光寺新城跡遺跡(第1次)発掘調査報告書
胆沢町教育委員会	胆沢町埋蔵文化財調査報告書 第17~19集
東京都北区教育委員会	北区埋蔵文化財調査報告 第3~5集
小矢部市教育委員会	小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第25~26冊
松任市教育委員会	松任市一塚オオミナクチ遺跡, 松任市横江A遺跡, 松任市竹松C遺跡, 松任市八田小鮎遺跡, 松任市中村ゴウデン遺跡
三重県教育委員会	三重県埋蔵文化財調査報告 72~75
愛知川町教育委員会	鯉遺跡発掘調査報告書
中主町教育委員会	中主町文化財調査報告書 第9・15・18~19集
能登川町教育委員会	能登川町埋蔵文化財調査報告書 第12~13集
彦根市教育委員会	彦根市埋蔵文化財調査報告書 第17~18集
日野町教育委員会	日野町内遺跡詳細分布調査報告書 昭和63年度版, 日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集
柏原市教育委員会	大泉遺跡 1985年度, 平尾山古墳群 1986年度, 平尾山古墳群一雁多尾畑49支群発掘調査概要報告書一, 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1988年度, 柏原市所在遺跡発掘調査概報 1988年度, 原山遺跡, 高井田遺跡 III
羽曳野市教育委員会	羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 17~18
伊丹市教育委員会	埋蔵文化財保護の手引き
川西市教育委員会	川西市栄根遺跡一第19次発掘調査報告一
岩美町教育委員会	岩美町文化財調査報告書 第11~13集
広島市教育委員会	広島市の文化財 第40~45集
御調町教育委員会	本郷平庵寺
徳島市教育委員会	徳島市埋蔵文化財調査概要 I
坂戸市教育委員会	若葉台遺跡一若葉台遺跡発掘調査報告書 I一
福岡県教育委員会	福岡県文化財調査報告書 第86・89集, 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 1

- | | |
|-------------|---|
| 甘木市教育委員会 | 甘木市文化財調査報告書 第22集 |
| 稲築町教育委員会 | 稲築町文化財調査報告書 第2集 |
| 大野城市教育委員会 | 大野城市文化財調査報告書 第21・27～30集 |
| 北九州市教育委員会 | 北九州市文化財調査報告書 第47集 |
| 小石原村教育委員会 | 小石原村文化財調査報告書 第2集 |
| 古賀町教育委員会 | 古賀町文化財調査報告書 第8集 |
| 新吉富村教育委員会 | 新吉富村文化財調査報告書 第4集 |
| 大平村教育委員会 | 大平村文化財調査報告書 第5集 |
| 直方市教育委員会 | 直方市文化財調査報告書 第10集 |
| 穂波町教育委員会 | 穂波町文化財調査報告書 第4集 |
| 吉井町教育委員会 | 月岡古墳, 若宮古墳群 I |
| 佐賀県教育委員会 | 佐賀県文化財調査報告書 第91～93・95集, 九州横断自動車道関
係埋蔵文化財発掘調査概報 第11集 |
| 清武町教育委員会 | 清武町埋蔵文化財調査報告書 第3集, 清武工業団地造成工事埋
蔵文化財発掘調査報告書, 若宮田遺跡発掘調査報告書 |
| 鹿児島県教育委員会 | 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書 49～51 |
| 釧路市立博物館 | 釧路市立博物館紀要 第14輯, 釧路市立博物館収蔵資料目録 K |
| 大船渡市立博物館 | 明治時代の錦絵～大和・浅井コレクションから～ |
| 北上市立博物館 | 博物館だより No.11 |
| 東北歴史資料館 | 東北歴史資料館資料集 23・25 |
| 秋田県立博物館 | 博物館ニュース No.77 |
| 埼玉県立さきたま資料館 | さきたま No.1 |
| 国立歴史民俗博物館 | 国立歴史民俗博物館研究報告 第19～24集, 歴博 第36～37号 |
| 大田区立郷土博物館 | 大田区立郷土博物館だより 第21号, 大田区立郷土博物館10周年
記念 わがまち博物館グラフィティ, 馬込文土村ガイドブック,
根付展図録 |
| 中野区立歴史民俗資料館 | 松が遺跡発掘調査報告書 |
| 青梅市郷土博物館 | 青梅ゆかりの文化財 |
| 調布市郷土博物館 | 調布市郷土博物館だより No.32 |
| 出光美術館 | 出光美術館館報 第65～67号 |
| 茅ヶ崎市文化資料館 | 資料館だより No.69 |
| 石川県立歴史博物館 | 石川れきはく 第12～13号, 昭和モダン, 石川県立歴史博物館紀
要 第2号, 三都と金沢 |
| 小松市立博物館 | 小松市立博物館だより 第42～43号 |
| 沼津市歴史民俗資料館 | 資料館だより 86～87 |
| 愛知県陶磁資料館 | 愛知県陶磁資料館研究紀要 7, 企画展「北陸のやきもの再興九谷」 |
| 豊橋市美術博物館 | 豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第8～10集 |

彦根城博物館	彦根城博物館調査報告 I
高島町歴史民俗資料館	高島の民俗 第65号
池田市立歴史民俗資料館	池田市制施行50周年記念—戦国の動乱と池田氏—
八尾市立歴史民俗資料館	八尾再発見
兵庫県立歴史博物館	兵庫県立歴史博物館ニュース No.28, わたりやぐら 第12~13号
神戸市立博物館	博物館だより No.29
西宮市立郷土資料館	西宮市立郷土資料館第4回特別展「農具と年中行事」展示案内図録
洲本市立淡路文化史料館	珉平焼~珉平焼とその系譜 賀集珉平から忘吾園窯まで~
奈良国立博物館	発掘された古代の在銘遺宝
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	大和考古資料目録 第16集, 橿原考古学研究所年報 14, 奈良県文化財調査報告書 第51集, 橿原考古学研究所附属博物館特別展示図録 第32冊
島根県立八雲立つ風土記の丘	八雲立つ風土記の丘 No.97
出雲玉作資料館	玉作資料館ニュース 第12号
津山郷土博物館	博物館だより No.2
倉敷考古館	倉敷考古館研究報告 第1冊
(財)日本はきもの博物館	日本はきもの博物館だより 35
九州歴史資料館	収蔵資料目録 5, 研究論集 14, 年報(昭和63年度), 大宰府史跡 昭和63年度発掘調査概報
佐賀県立博物館	佐賀県の歴史と文化一目で見る郷土のあゆみ—
長崎県立美術博物館	長崎県立美術博物館だより No.103
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース 第7集
東北学院大学東北文化研究所	東北学院大学東北文化研究所紀要 第21号
東京大学理学部遺跡調査室	東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 1
早稲田大学考古学会	古代 第88号
名古屋大学考古学研究室	名古屋大学考古学陳列室だより 第1号
天理大学附属天理参考館	資料案内シリーズ No.22~23
島根大学附属博物館	山陰地域研究 第5号
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	岡山大学構内遺跡調査研究年報 6
別府大学附属博物館	別府大学附属博物館だより No.33~34
鹿児島大学埋蔵文化財調査室	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 IV
東邦大学附属東邦高等学校考古学研究会	東邦考古 第14号

町田木曾森野地区遺跡調査会	東京都町田市木曾森野遺跡—歴史時代編—
下鶴間甲一号遺跡調査団	下鶴間甲一号遺跡—神奈川県大和市所在の遺跡—, 下鶴間甲一号遺跡—第2次調査—, 下鶴間甲一号遺跡—Ⅲ・Ⅳ地区の出土遺物—
玉川文化財研究所	高燥遺跡発掘調査報告書, 風久保西遺跡発掘調査報告書
国立国会図書館	日本全国書誌 No. 1, 710
中央公論社	図説日本の古代(第2巻) 木と土と石の文化
(株)有斐閣	探訪弥生の遺跡—畿内・東日本編—
クパプロ	新しい研究法は考古学になにをもたらしたか
(株)名著出版	歴史手帖 第191~193号
(財)山梨文化財研究所	帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第1集, 帝京大学山梨文化財研究所報 第8号
(財)古代学協会	土車 第49~51号, 古代文化 第368~369号
(財)冷泉家時雨亭文庫	志くれてい 第30号
大阪・郵政考古学会	郵政考古紀要 14
埋蔵文化財天理教調査団	埋蔵文化財天理教調査団研究会シリーズ I, 考古学調査研究中間報告 15~16
日本文化財科学会	日本文化財科学会 第6回大会研究発表要旨集, 日本文化財科学会会報 第17号
帝塚山考古学研究所	縄文早期を考える—押型文文化の諸問題—
朝鮮学会	朝鮮学報 第131輯
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 第30号
東義大 schools 博物館	東義大 schools 博物館学術叢書 2
(財)京都市埋蔵文化財研究所	昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要
京都市文化観光局文化財保護課	京都市文化財だより 第12号
京都府教育委員会	重要文化財角屋(主屋奥棟)修理工事報告書
峰山町教育委員会	京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書 第11集
福知山市教育委員会	福知山城絵図
綾部市教育委員会	綾部市文化財調査報告 第15~16集
宇治市教育委員会	史跡 隼上り窯跡
久御山町教育委員会	久御山町史 第二巻
山城町教育委員会	京都府山城町埋蔵文化財調査報告書 第6集
加茂町	加茂町史編さんだより紫陽花 第6号
京都府立丹後郷土資料館	丹後郷土資料館友の会ニュース No. 32, 特別展図録20 丹後縮編
京都府立山城郷土資料館	企画展資料10「発掘成果速報」—昭和63年度の調査から—, 山城郷土資料館だより 第11号
京都府立総合資料館	総合資料館だより No. 81

(財)京都府文化財保護基金	文化財報 No. 66
(財)京都古文化保存協会	会報 第67号
京都市京都文化博物館	海を渡ってきた人と文化—古代日本と東アジア—
亀岡市文化資料館	第5回特別展図録「亀岡鉄道物語」～汽笛がひびいて90年～, 第 8回企画展示図録「宝林寺」—信仰のこころとかたち—
向日市文化資料館	開館5周年記念特別展示図録「乙訓の古墳文化」
宇治市歴史資料館	宇治の古絵図—ふるさとの風景—
京都府立福知山高等学校	福知山高校資料室収蔵品目録 考古資料編
石部 正志	河内飛鳥を訪ねてみよう
大野 芳郎	園部円山古墳調査概報, 揖保川町文化財報告書 III～IV, 龍野市 文化財調査報告書 V
大塚 初重	赤羽横穴墓群—B支丘1号墓の調査—
関口 功一	古代史研究 第6～7号
谷本 進	但馬考古学 第5集, 兵庫県八鹿町文化財調査報告書 第7集
畑 美樹徳	三条九ノ坪遺跡第一次発掘調査報告書
樋口 隆康	斑鳩・藤ノ木古墳概報—第1次調査～第3次調査—
福田 惇	大和を掘る—1988年度発掘調査速報—
百田 昌夫	山口県文化財 第19号

—編集後記—

年末になり、何かと気ぜわしくなりましたが、情報34号が完成しましたのでお届けします。

本号では、中国陝西省文物管理委員会の黄曉芬氏に秦・漢代の考古学の成果について紹介していただきました。この時代は『史記』以外に文献史料が乏しく、考古学の成果が大きな意味を持っていますので、大変興味深い内容となっています。また、本年度調査しました奥大石古墳群について、詳細な内容で報告しております。よろしく御味読下さい。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第34号

平成元年12月26日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)